

Historical Studies of Socialist System

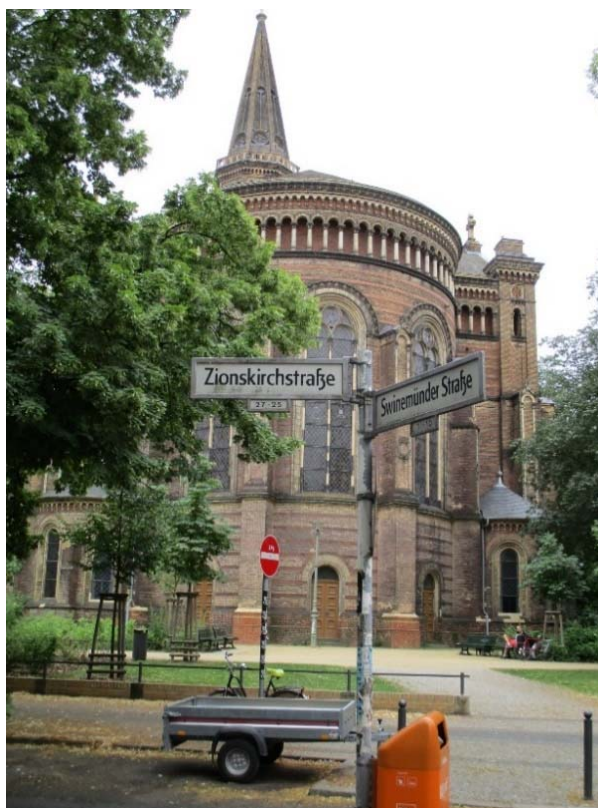
ISSN 2432-8774

# 社会主義 体制史研究

No.20 (September 2021)

東独体制転換過程の起点となった演出家クリアと歌手クラウチクの闘い  
青木國彦(東北大学名誉教授)

Der Kampf F. Kliers und S. Krawczyks für die Wende in der DDR  
Kunihiko AOKI (Professor emer., Dr., Tohoku University)



社会主義体制史研究会  
The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System

## 『社会主義体制史研究』(Historical Studies of Socialist System)

ISSN 2432-8774

Website: <http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>

下記の旧 URL から自動切替(リダイレクト)

旧 URL: <http://www.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>

(違いは www の次に「2」の有無のみ)

publisher: 社会主義体制史研究会

(The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System)

size: A4

mail to aoki\_econ3tohoku.4.5 (3=@ 4=ac 5=jp)

不定期刊(原稿があり次第発行)、文字数制限なし、無料のオンライン・ジャーナルです。

旧社会主義諸国(共産圏)の歴史(「革命」前・体制転換後を含む)と、社会主義や共産主義の思想・理論を対象に批判的検証を志しています。投稿歓迎。

### 表紙写真 東ベルリンのシオン教会(Zionskirche) (© Kunihiko AOKI, 2016)

東独反体制派の拠点でもあったシオン教会(背面)(東ベルリン・プレントラウアーベルク区)。

左前方に延びる道路の教会反対側に面した牧師館の地下の「環境図書館」(下図)が牧師ジモン(Hans Simon)に守られ、印刷機を備えて「教会規則に則った情報」として合法的に「環境新聞」を発行した。同図書館は撮影時点も存続していた。シオン教会の塔には誰でも昇ることができ、ベルリン中央区の色々な方向を見渡すことができる。ホーネッカーが訪日絡みで近辺の高さ規制の特例とし鹿島建設が建てた貿易センターが一際高くそびえている。

非合法誌「Grenzfall」(国境崩壊)も環境図書館の印刷機で印刷され、そのためシュタジ(東独秘密警察)は作戦「Falle」(罠)を発動した。シュタジの作戦名には駄洒落も多い。

### 図 シオン教会牧師館地下にある環境図書館(シュタジ撮影)



(注) 赤枠部分に今も環境図書館が所在。クリアとクラウチクの政治局員ハーガー批判の公開書簡をきっかけにここを MfS (シュタジ=東独秘密警察)が 1988 年 11 月 24 日から 25 日への深夜に急襲した。(出所) BStU, MfS, HA, XX/4 Nr.1968, Bl. 2, in: "Stasi durchsucht Umwelt-Bibliothek" ([http://www.bstu.bund.de/DE/Presse/Themen/Hintergrund/20121119\\_razzia\\_umweltbibliothek.html](http://www.bstu.bund.de/DE/Presse/Themen/Hintergrund/20121119_razzia_umweltbibliothek.html)) [2017.04.10 採取 (このサイトは現在見当たらない)。

## 東独体制転換過程の起点となった演出家クリアと歌手クラウチクの闘い

青木國彦\*\*

### Der Kampf F. Kliers und S. Krawczyks für die Wende in der DDR

Kunihiko AOKI\*\*

<b>目次</b>	
1. はじめに:ドイツ映画「善き人のためのソナタ」の演出家イェルスカ(Jerska)との対照 1	3.2 フォルクへのシュピーゲル誌インタビュー 10
2. クラウチクとクリアの経歴と闘い 2	4. 牧師ヴォンネベルガー(Wonneberger)の支援と国家圧力 11
2.1 クリア 2	5. 東独体制転換過程の起点としての二人の政治局員ハーガー批判公開書簡 12
2.2 クラウチク 3	5.1 公開書簡の経緯とシュタジの環境図書館急襲、歴史的役割 12
2.3 二人の職業禁止と決意 3	(補足 4)クリアの西独 SPD 批判 14
2.4 二人の闘い 4	(補足 5)非合法誌「国境崩壊」(Grenzfall) 15
2.5 クラウチクのプログラム「ブレヒトの夕べ」 4	(補足 6)ポッペ(U. Poppe)とシュタジ IM カーリン・レンツ(本名モニカ・ヘーガー(Monika Häger)) 15
3. 牧師フォルク(G. Forck)の支援と国家圧力 3	5.2 二人の政治局員ハーガー批判公開書簡の要旨 15
3.1 フォルクの二人への対応 6	(表 1)東独をその建国以来「去ったか去らねばならなかった」79 人の作家等 16
(補足 1)東独政府の「催し政令」 9	(写真補足)シオン教会と環境図書館 17
(補足 2)ベルリン 750 周年教会大会と「下からの教会大会」(1987年東ベルリン) 9	略語・引用文献 17
(補足 3)「手引き」の否定的評価 10	

#### 1. はじめに<sup>1</sup>:ドイツ映画「善き人のためのソナタ」の演出家イェルスカ(Jerska)との対照

2006年3月に公開され翌年オスカーを獲得したドイツ映画「善き人のためのソナタ」(原題「他人の生活」、以下「この映画」と略記)では、演出家イェルスカが7年間の演出家としての職業禁止(Berufsverbot)の末に1985年1月(脚本では前年末)に自殺する。

その追悼のために東独劇作家ドライマンが西独シュピーゲル誌に東独批判の寄稿をする。従って、職業禁止とそれによる自殺がこの映画の劇的演出の1つであった(この映画の全体像は青木 2020b 参照)。

東独の高い自殺率の主因を体制とするこの映画の見方は西側の通念であったが、それにはグラスホフやヤングといった研究者から厳しい批判が寄せられた(青木 2021:4 節)。

東独には作家や演出家以外にも多くの自由業が存在したが、自由業認可の取り消しによってその職業の禁止になると、本職での発表や収入が断たれた(詳しくは青木 2021a)。

だからといってそれだけで自殺が選択されるわけではない。この映画のイェルスカの自殺についてもグラスホフは主因として個人的原因を指摘した(青木 2021:14)。

東独の実生活では、イェルスカ自殺に当たる1985年(但し脚本では前年12月)に職業禁止になりながら、演出家クリア(Freya Klier)<sup>2</sup>とその夫でシンガーソングライターのクラウチク(Stephan Krawczyk)(以下「二人」と略記)は全く異なる対応をした。

ともに高い人気を得ていた二人は自殺しないどころか、職業禁止に公然と立ち向かった。それを支えたのは、東独福音教会の体制批判的な幹部や牧師たちによる二人の「教会の催し」への招待と合計8万人に及ぶその観客たちであった。二人の生活と活動の資金源は観客たちの寄付であった。

二人は、職業としての公演ではない教会出演を続け、教会の舞台から体制批判の歌と芝居を伝え、観衆を鼓舞した。思想的にはともにローザ・ルクセンブルクに支えられた。

1950年には東独住民の約80%が福音教会に属した(Deutscher Bundestag 1994:295)が、1990年には無宗教が61.3%を占め、福音教会は30.7%にまで激減し、カトリック6.6%、その他1.4%にすぎなかった(Spiegel Geschichte 2015:126)(関連数字は青木 2009:116 参照)。

しかし例えばクリアも関わった教会系の平和運動組織パンコウ平和サークルの参加者の半数が非信者であるように、「8万人」には多くの非信者が含まれたはずである。元々二人は教会外でも幅広い支持を得ていた。

二人と教会のこうした活動が可能になった背景にはまず二人の高い人気、加えてCSCE(全欧安保協力会議)プロセスの進展と西独との関係改善(経済的依存進展を含む)、東独教会内での独立平和・人権運動(独立は非官製の意味)の盛り上がりがあり、1980年台後半にはゴルバチョフ改革やホーネッカーの西独訪問などがあった。またクリアが入信していたことも教会内の積極的対応を促進したと考えられる。

教会の催しへの出演は職業としての公演ではないので、当局は表立って禁止することができず、教会に直接圧力をかけるか、協力的な教会幹部に阻止させるかしかなかった。

教会内部には最高ランクも含めシュタジ(東独秘密警察)のIM(非公式協力者)(密告・工作担当)や当局の協力者も少なくなく、二人の教会出演が阻止された場合も多い。

職業禁止は西独でも東独でも当局の公式用語ではなく、西独の公共部門の雇用からの政治的理由による排除(主な対象は東独シンパ)への抗議運動に由来する言葉であるが、たちまち東独にも流入した。

東独の職業禁止には西独同様に公共・国営部門での雇

\* in: <http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>. 既刊リストは第18号末尾に掲載

\*\* 東北大学名誉教授。Prof. emer., Dr., Tohoku University  
mail to: aoki\_econ3tohoku.4.5 (3=@, 4=ac, 5=jp)

<sup>1</sup> []は青木の挿入、…は青木による省略。

<sup>2</sup> クリアの生涯とクラウチクとの共同舞台の説明と21枚の写真:  
<https://www.spiegel.de/fotostrecke/ddr-buergerrechtlerin-freya-klier-fotostrecke-157921.html>

用禁止もあったが、主要対象であり社会的騒動になったのは作家や各種芸術家など「自由業従事者」から自由業認可を取り消し、出版や公演などを不可能にする措置であり、それこそ文字通り職業禁止であった。

東独刑法には「活動禁止」という処罰があったが、これは有罪者への追加処罰で、職業禁止とは別種であった(青木 2021a 参照)。

東独の職業禁止として最も有名なのは東独反体制派の象徴となるハーベマン(Robert Havemann)の国立フンボルト大学解雇(1964年)、自由業ではハーベマンの盟友ビヤマン(Wolf Biermann)のシンガーソングライターとしての11年間の職業禁止である。絶大な人気を誇った彼の追放(1976年11月)は多くの国民の衝撃と反感を生み、多くの文化人が抗議声明に署名した(青木 2020; 2020a)。だが公然たる大衆の抗議運動は生じなかった。

それに対して二人は多数の観客を動員する闘いに成功した。闘いは1987年に一層広がったが、当局はせいぜい秩序罰(罰金)の口実を設け得たのみで、逮捕に至らなかった。ようやく1988年2月に二人は事実上の国外追放となった。当局の長期刑の脅しによる出国同意であった。

以下では二人の経歴と闘い(2節)、その際の福音教会内の支援と葛藤(3節・4節)を説明する。

最後に、長年東独文化政策の元締めであった政治局員ハーガーの報告を痛烈に批判した二人の公開書簡(1987年11月)を取り上げる(5節)。この公開書簡が大きく取り上げられることは少ないが、これこそがいわゆる東独平和革命に到るプロセスの直接の起点となったことを説明する。

## 2. クラウチクとクレーアの経歴と闘い

1988年1月17日に東独当局は例年通り「カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルク追悼闘争デモ」を実施した。

その東ベルリンでの公式デモに、出国派(当局に出国申請を出し許可を勝ち取ろうとするグループ)を主とする一団が「自由とは常に異論を持つ者の自由である」というローザの言葉を描いた横断幕を掲げて入り込み、独自デモをしようとした。クラウチクを含む彼らはデモ実行直前に逮捕され、その後も関連逮捕が続いた(以下ローザ・デモ事件と呼ぶ)。

出国派にローザのこの言葉を薦め、かつ独自デモにも参加しようとしたのが、ローザのファンであるクラウチクであった。但し彼自身は出国希望ではなかったため、「新しいシャツに赤く“DDRにおける職業禁止反対”と描いた」横断幕を持ってデモに参加するためにアパートを出てすぐ逮捕された。

その妻クレーアもローザファンであったが、彼女は出国派との協力を嫌ってデモ当日は自宅にいた。しかし彼女も逮捕された(詳しくは青木 2016)。

前年11月には東ベルリン・シオン教会牧師館の環境図書館(本稿末尾の図 a~f)へのシュタジ急襲事件が起こった。そのきっかけも二人であった。両事件には壁建設以来大規模抗議集会在連日教会で開かれた。そのためシュタジは「邪魔者」(Störenfried)という感情むき出しの名を付けた大作戦を長期に続け、当局にとってのこのことの重大さを示した。

では二人はどのようにしてそこに至ったのか。

### 2.1 クレーア

<sup>3</sup> プレンツドルフは「自主出版」による検閲打破を目指したアンソロジー「ベルリン物語」の組織者の1人である(青木 2020a)。代表作

1950年生まれのクレーアは、1953年父(インテリアデザイナー)の逮捕、懲役1年の有罪判決[おそらくいわゆるベルリン暴動関連]により、兄とともに[平日の日夜預かる]週間保育所(Müller-Enbergsでは国家養育院)に入れられた。

兄が国家中傷罪で有罪となったあと、高校卒業(アビツア)直後の彼女は商船でのスウェーデン脱出(「共和国逃亡」)を図ったが裏切りにより1968年6月逮捕、16ヶ月の有罪となった。1年で出所し(残り期間は執行猶予2年)、郵便職員やウェイトレスなどを経て1970-75年にライプツヒの演劇大学(Theaterhochschule)、1978-82年東ベルリンの演出研究所(Instut für Schauspielregie)で演出を学んだ。

1980年から独立平和運動、特に「パンコウ平和サークル」(詳細下記)や「連帯する教会」[ともに共同創設者]に関わり、また1983-1984年に非公式の女性アンケートを実施した。

1982年演出家デビュー、1984年プレントドルフ(Ulrich Plenzdorf)<sup>3</sup>の「果てなき幸福の伝説」(Legende vom Glück ohne Ende)の演出で国家賞獲得、自由業演出家資格を得たが、1985年に演劇同盟(Theaterverband)除名による事実上の職業禁止となった。職業禁止後は、1984年2月に知り合ったクラウチクとともに福音教会で上演を続け、また1986年活動グループ「連帯する教会」(Solidarische Kirche)創設メンバーになり、非公式の青年アンケートも実施した(Veen 2000:214; Müller-Enbergs 2010:672)。

演劇同盟の正式名は「舞台人同盟」(Verband der Theaterschaffenden)である(Veen 2000:215)。

クライン(Klein、経歴は青木 2021a 参照)も同じ頃に「労働の性格」の非公式アンケート調査をした(Müller-Enbergs 2010:666)ので、両者に連携があったかもしれない。

教会出演以外に「友人たちの助け」によるアパートでの上演もあった(Klier 1989:120)が、観客数は限られる。

共和国逃亡未遂罪で出所後の大学進学やにらまれていたプレントドルフの劇での演出賞は驚きである。

Klein(2007:355)には異なる記述がある:彼女は「1985年以来事実上国家によるDDR内の労働禁止(Arbeitsverbot)」、「続いて彼女の職業団体[演劇同盟]からの除名」となり、「1986年秋」に西独からの「ゲーテの“Clavigo”(クラヴィーゴ)の招待演出」に応じることを当局が拒否した。「1987年に彼女の自由業演出家としての活動認可の[東ベルリン]市役所による正式な取り消し」となった[Klier(1989)の説明(2.3節)とは異なる]。その際当局は彼女が自由業による「収入を得なかった」という「シニカルな理由付け」をした。

「事実上の労働禁止」の説明はないが、労働は憲法上の権利かつ義務だから奇妙である。彼女の自由業収入なしは当局や職業団体の妨害によるのだから、この認可取り消し理由が事実なら、むしろ不当であった。西独招待が許可されれば彼女は高額のハードカレンシー収入を得たはずだった。

彼女は福音教会に入信し[東ベルリン・パンコウ区]のイマヌエル教会区(Immanuelgemeinde)に所属した(Klein 2007:355f.)。彼女の入信がパンコウ平和サークル創設の前か後かは分らない。

パンコウ平和サークル(Friedenskreis Pankow)は、「古パンコウ教会区」(Kirchengemeinde Alt-Pankow、教会名は「古教会区」(Alte Pfarrkirche)、旧称「パンコウ村教会」)

の邦訳がプレントドルフ(1979)である。

の女性牧師ミッセルヴィッツ(Ruth Misselwitz)が 1981 年 10 月 24 日に「情報の夕べ: 死に反対して—平和のための安全」を開催し結成を呼びかけた。「中核」メンバー約 30 人のもとにテーマ別のグループが活動し、非キリスト教徒が約半数を占めた。同サークルは、「長年にわたり福音学生教区の平和サークル、のちのフリードリヒスフェルデ平和サークルや、[牧師]エッペルマン(Rainer Eppelmann)のまわりのサマリア人教区のサークル」などととも、[平和運動に]「長年にわたり指導的」役割を果たした。同サークルから「クリアのようなのちに著名となる若干の女性市民権活動家が出現した」(Neubert 1998:465)。

## 2.2 クラウチク

クリアの経歴には起伏が激しいが、クラウチクは 1980 年代初めまでは体制の寵児であった。

クラウチクは 1955 年生まれ、アビツア終了後 1974-1976 年兵役、1976 年 SED(東独支配党)入党、1978-82 年ワイマールのリスト音楽大学コンサートギター科通信教育受講[その間に下記のようにシャンソン・フェスティバルで最高賞受賞]、1982 年自由業の作詞作曲家資格を取得した。

1984 年東ベルリンに転居し、[クリアと出会い、また]反体制グループと接触し、権力乱用や環境破壊、消費社会、選択肢の欠如など、社会批判の歌を作詞作曲した。

彼は独立平和運動の催しに出演し 1985 年 SED を脱退した。その結果自由業資格取り消しによる職業禁止となり[その詳しい経過は 2.3 節]、その後は単独ないしはクリアとともに教会や私的な場所で上演し、人気を集めた。

彼は 1986 年 10-12 月に西ベルリンからの非合法放送「黒いチャンネル」(Schwarzer Kanal) を実行した(以上 Müller-Enbergs 2010:721, Klier 2007:355)。

黒いチャンネルは彼がシュルト(Reinhard Schult)<sup>4</sup>らとともに、東独テレビのプロパガンダ番組「黒いチャンネル」<sup>5</sup>に対抗するために設置した非合法放送である。いわば反「黒いチャンネル」で、東ベルリンで録音した批判的内容を西ベルリン・クロイツベルク区の壁近くに無許可で設置した場所から支持者がラジオ放送した。東ベルリンでは住宅の郵便受けに放送予定のチラシを入れた。

しかし大きなリスクに比べて反響が小さく、また東独の強力な妨害電波があり、短命に終わり、「ラジオ・グラスノスチ」が

<sup>4</sup> 1951 年東ベルリン生まれのシュルトは兵役を拒否してその代替に 1976-1978 年に「建設兵士」を務めた。1979 年には共和国逃亡幫助と国家敵対的文獻、とりわけ追放されたビエマンのテキストの流布で 8 ヶ月の有罪となった。その後色々な反体制活動、特に「反対票」や「下からの教会」で活動したのち、1989 年 9 月「新フォーラム」結成呼びかけ人の 1 人になり、その代表として中央円卓会議に参加した。翌年 1 月シュタジ本部の占拠主導者の 1 人になり、その後もシュタジ解体に寄与した。両独統一直前の 1990 年 9 月にはシュタジ・アーカイブ占拠とハンストに参加してシュタジ文書のドイツ連邦公文書館への移管を阻止した(Veen 2000:323)。しかし 2021 年 6 月にシュタジ文書は連邦公文書館に移管された。

<sup>5</sup> 1960 年から 1989 年 10 月末まで続いた長命番組で、反体制派には悪名高いコメンテーター・シュニツラー(Karl-Eduard von Schnitzler)が担当し続けた。番組開始にあたり彼は今後、「西独テレビの黒いチャンネルを通じていかに虚偽が放送されているかを説明し」、「いわば浄化装置として役立つ」つもりだと言った(Der Spiegel 16/1960)。これが奇妙な番組名の理由である。

<sup>6</sup> ラジオ・グラスノスチ(Radio Glasnost)はクラウチクらの反「黒いチャンネル」破綻を受け、1987 年から西ベルリンの認可された「ラジ

あとを継いだ<sup>6</sup>。[妨害電波は本来 CSCE プロセス違反であるが、]これは西ベルリンでも無許可放送ゆえ西独・西ベルリンは東独に抗議しなかった(Veen 2000:324)。

補足すると、彼は 1970 年末まで東独官製青年組織 FDJ(自由ドイツ青年団)の歌声運動<sup>7</sup>のリーダー(FDJ ゲラ県歌声センター長)であり、歌声運動の一環である全国シャンソン・フェスティバルにおいて 1981 年に最高賞(Hauptpreis)を得た(Stiftung Haus 2001:152)。シャンソン・フェスティバルの正式名は「DDR シャンソンの日」(Die Chansontage der DDR)で、1973 年から毎年開催された。

## 2.3 二人の職業禁止と決意

Klier(1989:1)にはクリアも 1985 年に「職業禁止」となったとある。しかし彼女の場合は同年に自由業認可を取り消されて職業禁止となったクラウチクとは職業禁止の手法が異なる。以下がクリアの日記にある二人の職業禁止の経緯である(Klier 1989:113-115,121,179)：

クラウチクに東ベルリン市役所から「些細なこと」について 1985 年 7 月 30 日 14 時に来るようにという手紙が来た。不在だったため遅れて彼は 8 月初めに市役所へ出向いた。すると、些細なことではなく、「全国的な職業禁止を科された」。

「彼が聞き手の公民意識を侮辱し、さらに DDR の舞台に立つ道徳的および芸術的適性を持っていない」ことが理由とされた。この理由は、彼が「1981 年に DDR のベスト・シャンソン歌手賞を受賞した」し、「目下最多の出演とたぶん最大の入場者数を持つソングライターである」という事実と反する。

だがこのような人気こそが彼らにとって「まさに問題点」であった。というのは当局が「最近数ヶ月圧力と威圧」を加えたにもかかわらず、「わずかなクラブハウスでしか「自由意志」に基づくクラウチクの招待取り消し」に成功しなかったからである。だから当局は「好みでない芸術家を最終的に廃棄処分にする唯一の可能性を公式の職業禁止に見た」。

この「口頭通知と同時に、SED 中央委員会のこの決定はテレックスで DDR の最小の片田舎に至るまで送られた」。

「公式の職業禁止」は、「認可取り消し」という公用語で呼ばれる。[認可は自由業認可を指す。西独と異なり、東独で話題の中心になった職業禁止方法は自由業認可取り消しである(青木 2021a)]。

「我々は茫然と」した。というのは 9 月だけでも「我々の作品

オ 100」(Radio 100)の中の 1 時間番組として始まった。ヤーン(Roland Jahn,最後の BStU 長官)らが企画した。反「黒いチャンネル」に比べ電波がずっと強く、放送予定がラジオ 100 によって周知され、内容も改善され、多くの聴取者を獲得し、録音によって放送エリア外にも伝わった。1990 年 1 月に使命を終えて放送を終した(Veen 2000:292)。ヤーンは東独イエーナの果敢な反体制活動家で、1983 年追放され西ベルリンから作家フックスらとともに東独反体制派を支援した(青木 2014:5-6 等)。

<sup>7</sup> 東独の歌声運動は 1966 年に東ベルリンで同地在住カナダ人が設立したアメリカフォークソングを歌う「フーテナニークラブ」(Hootenanny-Klub)から本格化した。FDJ が、このクラブを「10 月クラブ」と改名した上で、全国に設立する歌声クラブのモデルとしたからである(Stiftung Haus 2021:151)。

歌声運動開始はその前年、1965 年に、「ギター運動」(Gitarrenbewegung)として FDJ が助成していたビート・バンドの多くがホーネッカー主導で突然公演禁止となった(青木 2021a:4 節)ことへの青年の不満への対策であっただろう。1973 年東ベルリンでの世界青年学生祭典にも多くの歌声サークルが野外ステージに出演した(青木 2019:5,20,29)。

〔芝居〕に13の出演約束(うち教会教区から2つ)とシュテファン〔クラウチク〕の9つの歌のコンサートを予定していたからである。彼はすぐ文化省に会見要求を書いた。

これで「2つの職業禁止」になり、二人の「生存に関わる」。「なぜなら、私もその間に完全に冷遇されているからだ。私は説明なしに演劇同盟〔=舞台人同盟〕やハンガリー作業部会、DDRドラマ専門委員会から排除された」。出会った人々は皆私に同情し「すぐに劇場に復帰できる」と言ってくれるが、「今まで誰も効果的な場所で連帯を示す」ことはなく、「皆がちゃんと口をつぐんでいる」。

〔従ってクラウチクは自由業認可取り消しという公式の職業禁止に、クレーアは公認団体からの除名による事実上の職業禁止となった(両方法は青木 2021a:4)。〕

「我々は屈しない。職業禁止の目的はたぶん出国させることだが、彼らはそれを我々に期待するとはとんでもない」。それは「年々ますますかび臭くなるこの国が非常に気に入っているからではなく、我々が頑固だから」であり、また「それぞれが自身のために芸術的な責務を引き受けたからでもある」。〔クラウチクは出国派に理解を示したが、クレーアは出国意志を持たず、出国派を嫌った(青木 2016)。〕

クラウチクの職業禁止にもかかわらず「我々は我々の作品“落石”を文化省に提出する」。(以上日記「1985年8月初め」から。)

クラウチクの「同僚の臆病」はひどく、「最近行われたソングライターのための専門協議会」において「この職業禁止に抗議した」のはただ1人(「まだ SED 党员」)であり、「他の誰もがおとなしく静かに黙っていた」。それには、クラウチクの職業禁止は「彼らにとって出演が増える」という「全くブラグマチックな理由」もあった(日記「1985年10月半ば」から)。

その後クラウチクは何度か職業禁止解除申請を出し、3回目が1987年1月2日であった(Klier 1989:173)。

クレーアは1987年2月8日に職業禁止解除を要求した。3月29日の日記はこれを「請願」と呼ぶから国家評議会宛てだろう。これも「再び処理されずに」消えたとある(Klier 1989:177,183)。だからこれが2回目になる。

## 2.4 二人の闘い

二人はシュタジの作戦事案(OV)「ジーヌス」(Sinus、空洞)の対象になった(Veen 2000:215)。

東独の「1980年代の新しい文学・音楽・造形の地下シーン」において作家の「ブラウン(Volker Braun)、ヴォルフ(Christa Wolf)、ハイン(Christoph Hein)、あるいはハイム(Stefan Heym)」らは「意図的に脱政治的」であり、「反体制派との実りある直接的結び付きを実現することなしに、政治的にも忠実であり続けたことが明らかになった」。

しかし二人は彼らとは「先鋭的な対照」をなす「全く異なる」者であり続け、そのため彼らへの「国家の怒りが1987年末に頂点に達した」。作家「ラテノウ(Lutz Rathenow)とローゼンタール(Rüdiger Rosenthal)」や歌手「ベッティーナ(Bettina Wegner)」らが二人と同様であった(Klein 2007:354ff.)。〔ベッティーナは青木 2020a:8,16 参照。〕

この状況は当局の文化人対策の成功の反映である。シュタジはビアマン追放(1976年11月)への文化人の抗議活発化に、アンソロジー「ベルリン物語」鎮圧成功体験に基いて厳重に対処し、また作家同盟では1979年に会長就任直後のヘルマン・カント(シュタジ協力者)が作家9人を除名した(青

木 2020:11)。「国家機関はかくて数年以内に批判的精神を外国へあるいは国内亡命へ駆り立てる不安の雰囲気を作り、「1980年代初めに入るとともにシュタジは、DDR文学シーンの全般的な麻痺」を確認し、「“作家の圧倒的多数”が肯定的または少なくともDDRに忠実である」と見なした。こうした「瀕死状態は、ホーネッカー時代の大声を出さないが、だから非常に陰険な分解方法の直接的結果であった」(Walther 1996:273)。

職業禁止にもかかわらず二人は1985年から共同の芝居に取り組み、同年「落石」(Steinschlag)、1986年「旅券とうわさ」(Pässe und Parolen)(脚本未入手のため多義的なParolenの訳語は確定できない)、1987年「再び立つ」(Wieder stehen)が生まれた。それらの中では「例えばDDRにおける人種差別主義のような絶対的タブーのテーマ」が取り上げられ、「国家権力のますます激しくなる介入の原因になった」。同時にクラウチクはソロ・リサイタル、クレーアは女性問題と教育制度の調査結果の朗読会を開催した。

これらの催しは福音教会の「勇敢な牧師や教区長老会」ないしは平和サークルのイニシアチブによって可能となったが、他方で二人および支援者への国家の圧力・介入も「ますます激しく」なった。

同時に二人への支持も強まり、例えば1987年には10月30日～11月30日に限ってもクラウチクの出演が東ベルリン7回、コトブス県4回、ポツダム県3回、計14回も予定され、ほかにフランクフルト県やカールマルクスシュタット県でも見込まれた。(以上別記以外は Klein 同前による)

Klein(同前)は二人の出演へ当局から教会幹部への圧力と教会側の対応の例を幾つも挙げるが、詳しい説明はない。

上記にある二人への「国家の怒り」の対象は二人の歌や芝居の内容と人気、独立平和運動への寄与などである。

独立平和運動は1987年9月1～18日に教会内を出て街頭に進出した。「中欧非核化回廊」実現のために両独とチェコスロバキアの平和組織が実施した徒歩による東独縦断約150kmのパルメ平和行進である。東ベルリン市内では1000人規模の行進になった。この企画はホーネッカーの西独訪問と時期が重なり、当局は禁止することができなかった。

クレーアによれば、二人は同年9月上旬に、翌年1月のローザ・デモに独自参加し職業禁止取り消し要求を掲げる計画を立てたが、それにはパルメ行進がヒントになっただろう(青木 2016:160)。東独の非政府組織が党・政府と異なるスローガンに掲げた隊列による公然たる街頭行進を成功させたのはいわゆるベルリン暴動(1953年)以来のことであった。

上記のように「国家の怒りが1987年末に頂点に達した」理由は、11月の政治局員ハーガー(Kurt Hager)とその文化政策を痛烈に批判した二人の公開書簡の発表とそれを掲載した非合法誌「国境崩壊」への環境図書館の関与にあった。

この公開書簡の発表は、2週間後のシュタジの環境図書館急襲事件と翌年早々のローザ・デモ事件に発展し、いわゆる平和革命に到るその後の激動のプロセスの直接の起点となった(詳しくは5節)。

1988年1月17日のローザ・デモ事件でクラウチクが逮捕され、その後クレーアも逮捕され、同年2月2日二人は西ベルリンへ出国した。重刑の脅しで出国に同意、事実上の国外追放であった(青木 2016:159)。

## 2.5 クラウチクのプログラム「プレヒトのタベ」

二人の闘いには二人の芝居とクラウチクのソロ・リサイタル

に加えて、クラウチクのプログラム「ブレヒトの夕べ」(Brecht-Abend)も大きく寄与したが、その実際の模様は上記の Klein (2007)にも 3・4 節で紹介する牧師らの二人への支援の場面にも出てこない。しかしそれは「彼の芸術的資質を証明した」と評される(Sachse 2009:198)。

クリアーの日記によれば、ブレヒトの夕べは「最初から最後までブレヒトの文章の中の言葉から成る」。彼はその初演を 1986 年 3 月 6 日にあるクラブで「閉鎖的な友人グループ」向けに予定した。それは「私的かつロコミ」による開催だったが、国家機関に露見し、実行すれば「警察部隊」が排除すると、朝のうちにクラブ責任者が警告され、夕方にはクラブを「シュタジが取り囲み」、集まった「人の群れ」の中にも紛れ込んだ。警察の出動になるとクラブ責任者が失職するので、「上演を見る代わりに人の群れがこの国にうんざりし、拒否の仕草をしつつ飲み屋に移動する」(Klier 1989:134,139)。

同年 3 月 28 日に「ブレヒトの夕べ」を文化省に提出し、同時に職業禁止解除も申請した。クリアーは「どのようにブレヒトを禁止しようとするのか」と興味津々であった(同前:142)。

このプログラムは「街じゅうでうわさになり」、ブレヒトの若い時期のドキュメンタリー映画企画者がその一部の利用許可を当局に求めたが、たとえブレヒト映画でも、同年 5 月初めに「文化当局はクラウチクの声や音楽の参加を禁止した」(同前:144)。

クラウチクは「ブレヒトの夕べ」についての職業禁止解除を申請したが、その件で同年 5 月 30 日に市役所が彼を呼び出し、「彼の歌のカセット」を見せ、それらは「彼の禁じられた曲の DDR 内秘密配布」として刑法に触れる、ましてやブレヒト映画の「前奏曲[への利用]は問題にならない」と通告した。

彼は「楽観的」ではなかったが、この通告によって「ひどく打撃を受けた」。「ところが捨てる神あれば拾う神あり」「それから驚きが生じた。「1 人のベルリンの牧師がシュテファン[クラウチク]に 6 回(!)ものブレヒトの夕べのために彼の教区ホールを提供する」。彼は「我々が決してそんなには信じたことがなかった」牧師であった(同前 151f.)。

他方で上演キャンセルもあったが、その 1 つの驚きの結末について日記が記している(同前 231f.):

1987 年 11 月 7 日午後には彼女は、クラウチクの「ブレヒトの夕べ」上演のため一緒にツヴィカウ[東独南部の町、当時カールマルクスシュタット県]へ行く。シュタジが付いてくる。

到着後に中止を知らされた。「東ベルリンからは遠いのだから」「我々は呆れてものも言えない」。「今夜の組織者」(教会の青年職員)は昨日電報を送ったと言うが、「我々は何も受け取らなかった」[電報も検閲対象]。

「上司の牧師と教区監督が一致してひっくり返した」のであり、「ブレヒトが今や教会でもキャンセルされる」。

これらの「臆病なくそ牧師ども」は「職業禁止や旅行禁止が何を意味するかをうわさでだけしか知らない」[二人の職業禁止は商業的公演禁止であって教会催しへの出演は可能であることを彼らは知らない、という意味]。

しかしクラウチクは「我慢できなくなる」。「彼は上演すると言い、準備し始める。すると「紳士たち」3 人(牧師や教区監督たち)が現れ、寒風の中でのやりとりの結果、「牧師や教区監督たちに関する否定的な表現をしない」という条件付きでブレヒトの夕べ上演が可能になった。

「紳士たち」は条件遵守の確認のために上演を見た。そのうちに内容に「次第に注目する」。「それは彼らを感動させる」。

しかも感動したと彼らがクラウチクに伝えたので、二人は第一印象を覆し、「彼らの人格に思いがけない輝き」を見た。

ほかにも、一旦ひるんだが、上演を中止しなかった牧師がいた(同前 249f.)。1987 年 11 月 23 日に予定されていたゴルゴタ教会[東ベルリン地下鉄駅クスター通り近く]の教区会館での「ブレヒトの夕べ」である:

事前に「諸国家機関」が招待取り消しを図るために「スキンヘッドが予想される」と牧師に通知した。彼らは最近「隣の教会を襲った」し、シュタジがスキンヘッドにクラウチクは「パンクかつユダヤ人だと吹き込むなら、彼らが行進してくることを排除され得ない」。そのため「年輩の牧師は即座に[上演を]キャンセルした」。「当時東独でもネオナチが問題になった」。

そこでクリアーが牧師を 2 日間にわたって説得したところ、彼は「なんとか」踏みとどまり、上演されることになった。

その日の夕方には教区会館前に多くの警察官と警察犬が配置され身分証をチェックする。

クリアーは、上演が始まった会場に入ると、「即座に何か変だと感じる。観客はいつもブレヒトに非常に神経を集中するが、いまは床をこすったり、音を立てたり、大きな声で雑談」する者たちがピアノのある隅のほうにいる。「情熱的に闘い取られたブレヒトの夕べ」をぶち壊しに来た「シュタジだ」。

彼女は「ピアノのほうに向かって大声で、しかし冷静に、もう我慢できない、シュタジは帰れと叫ぶ」。すると「自然発生的な、示威的に長い拍手。その後静かになる。抵抗の雰囲気、すべての言葉、すべての曲が部屋を満たす。この夕べは特別な次元を得る」。

この日のブレヒトの夕べについてのちに分ったことが同年 12 月 2 日の日記にある(同前 252f.):

フンボルト大学助手の女性 2 人は党組織からゴルゴタ教区会館のブレヒトの夕べへ行き、雑音を立ておしゃべりして「退屈した観客」を演じる「階級任務」を与えられた。

それは、「目下国家の最も危険な敵であるクラウチク氏は、DDR への敵対的扇動をするために、そこでブレヒトによって自分を偽装する」という理由による任務であった。


だが実際の「クラウチクは国家の敵という彼女らのイメージには全く合わなかった。逆にそのテキストと歌は彼女らを夢中にさせ」、だから彼女らは雑音を立てずに「聴き入った」。しかし彼女らは、隣席の連中が立てる雑音に「非常に邪魔された」。

その時「1 人の女性[クリアー]が立ち上がり、シュタジは家へ帰れと叫び、ホール全体が一斉に拍手し」、彼女らもいる雑音源の方角に視線を注いだ。「彼女らは党(SED)に裏切られたと感じている。今や、彼女らはいかにして[党から]脱退することができるかを熟慮している」。

二人は 11 月 23 日の夕べにおいて小さな勝利を得たが、シュタジは翌日深夜、二人の公開書簡に関連して環境図書館を急襲したが、失態を演じて、大きな抗議運動を引き起こす(5.1 節参照)。

### 3. 牧師フォルク(G. Forck)の支援と国家圧力

二人の教会の催しへの出演による職業禁止の有名無実化を阻止するために、国家は教会に強い圧力をかけ、教会内に軋轢が生じた。そこでその事例として、体制に批判的だった 2 人の福音教会指導者をめぐる出来事を紹介する。

まずベルリン・ブランデンブルク福音教会監督(Bischof)フォルク(Gottfried Forck, 1923-1996、)を取り上げ、3.1

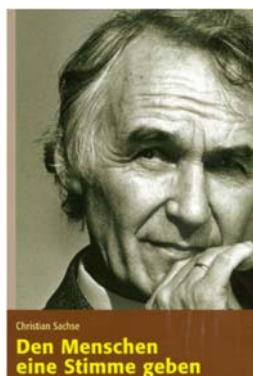
節では彼の伝記のうちの該当部分 (Sachse 2009:197ff.) を、**3.2 節**ではシュピーゲル誌のフォルクへのインタビューのうちの二人関連部分を紹介する。

### 3.1 フォルクの二人への対応

上記のように以下は Sachse (2009:197ff.) による:

フォルクは「反体制的青年グループに教会を開放した」人である。[だからむしろ二人にも機会を提供した。]

図1 フォルク(Sachse 2009 表紙)



すでに「1970年代半ば以来、批判的および順応しない芸術家は繰り返し教会の中に活発かつやりがいのある観客を見つけた」。それに寄与したのは、福音教会の「様々な学生教区や福音派アカデミー、“開かれた活動”だけではなく、DDR体制の文化的欠陥の軽減を助けることを彼らの使命と理解した多くの“普通の”教区であった」。

「開かれた活動」(Offene Arbeit、略称 OA)は、東独福音教会が1960年代から実施した青年向け活動で、キリスト教徒に限らず全青年に「開かれ」、当初から社会的・政治的テーマを扱い、イエーナ青年教区がその全国的拠点であり、その活動の中から「イエーナ平和共同体」(Friedensgemeinschaft Jena)も誕生した(青木 2014:4)。

クリアは演出家として「プレントドルフのような順応しない作家を舞台に持ち込んだ」[2.1節参照]。

クラウチクは[ゲラ県の3人による]「グループ“リートエーアリッヒ”<sup>8</sup>の歌手であり、独自のプレヒト・プログラム[=2.5節の「プレヒトのタベ」]によって彼の芸術的資質を証明した」。

二人とも「公式の文化事業において非常に成功し様々な賞を受賞した」が、「反体制グループメンバーの共感」も得た。

二人は[その後ともに職業禁止となり]、「一致した高い前評判のもと1985年に教会での活動を始めた」。二人は「プログラムのプロフェッショナリズム」および「長年の舞台経験と自分自身への高い要求」により、「催しのマネジメントと教区が示すように1年以内に行動範囲としてDDR全体(主に福音教区)を征服した」。

「サミズダートには1987年に[二人の]約75の催し計画が紹介された」<sup>9</sup>。このリストに漏れた催しもあるが、他方でリストのうち「一連の催し」が中止になったので、この数字は二人の活動規模の「大まかな指標」である。

二人のプログラムは「挑発的」で、「政治次元だけでなく人間相互および教会の次元でも考え得るすべてのタブーを破

った」ので、「DDRの灰色の日常生活のしがらみからの解放」という効果があった。しかし[当初の]「メッセージは表面上は政治的には全くなかったので、クラウチクの“我々は相変わらず集まる”というプログラムは1986年1月にある教会新聞で賞賛され、国家の介入もなかった」。

ところが「1986年半ばにベルリン・ブランデンブルク教会指導部に国家当局の介入についての最初の知らせ」が届き、二人に関連して「牧師や教会青年職員が催し政令(VO Veranstellungen)を遵守するように警告された」。

[当局は職業禁止後の二人の教会出演を、教会への配慮からしばらく静観したが、そのあまりの広がりや影響力に1986年半ばには我慢できなくなったのだろう。その後フォルクは担当当局に二人の催しは催し政令の届け出義務に該当しないと通知した(Sachse 2009:202)(詳しくは下記)。同政令は**補足1**参照。なお上記の「教会指導部」(die Kirchenleitung)は1つの教会の指導部ではなく、州教会傘下の諸教会を束ねる指導部であり、ここではベルリン・ブランデンブルク福音教会全体の指導部を指す。]

1986年夏にはフランクフルト県フュアステンヴァルデ(Fürstenwalde)の監督が、二人は「ある催しを教会内にふさわしくないという理由で中断させたといううわさが広まった」。うわさを利用して「教会指導部の[中の体制派の]何人か」が幾つかの教区に二人を招かないように指示した。

実際にはこの催しは最後まで実施され、監督も議論に参加した。そこでクリアが、うわさは偽情報であることを「すぐに広範囲に配布された手紙で指摘し」、そのため上記の「何人か」は釈明せざるを得なかった。

しかし同年8月18日には東独福音教会長老会(Konsistorium)が事実上二人を出演させないとの勧告をした。10月には教会指導部が「内々の意見形成」として「クリアとクラウチクの今後の出演を禁止し」、これが「うわさ」として広まった。二人の「粗野な言葉」が彼らの気に入らなかったからである。この「うわさ」に対して二人は、フォルクその他に手紙を送り、「プロテスタント教会はその伝統からもまさにDDRの文化的欠陥に立ち向かう義務がある」と記し、「彼らに有利な原則決定を要求した」。

図2 サマリア人教会(ベルリン)



(出所) 2011-2-20 F'hain (30) - AMA fec.jpg, in: Wikipedia Commons (CC BY-SA 3.0)

同年11月13日には東ベルリンのサマリア人教会(図2)で二人の芝居「旅券とうわさ」(Pässe und Parolen)の初演

<sup>8</sup> Liedehrlich。Lied(歌)と ehrlich(正直な)の合成である。liederlich(だらしない)をもじったのかもしれない。グループ名と同じタイトルのLP(AMIGA発売)中古品がAmazon.deに出ている。

<sup>9</sup> このサミズダート(地下出版)(単数定冠詞付き)はフリードリッヒス

フェルデ平和サークル(青木 2021a:脚注参照)発行の、よく知られた反体制誌「フリードリッヒスフェルデの火災報知器」(Friedrichsfelder Feuermelder)である(青木 2021a:5参照)。



が行われた。「それは DDR の状態のタブーなき批判ゆえに急速に有名になった」(図 3)。

図 3 クリーア(左)とクラウチクの芝居「旅券とうわさ」の初演



(注) 1986 年 11 月 13 日東ベルリン・サマリア人教会にて。  
(出所) <https://www.dissidenten.eu/laender/deutschland-ddr/biografien/freya-klier/freya-klier-teil-2>

1987 年初めから二人および教会の催し主催者(「牧師、監督、教区教会役員会」)への「国家の圧力」が増大し、「ポツダムでは主催者に 1000 マルクの秩序罰が科された」。

[1000 マルクは国有企業労働者・職員 1987 年平均粗月収 1280 マルク(東独統計年鑑 1989:129)の 78%相当。]

また「表面上は国家の圧力が隠された[教会側による]突然の[催し]中止もあった」。フォルクのもとには、二人の催しが中止された「諸教区メンバーの抗議の手紙」が寄せられ、一部は教会税拒否も表明した。

ベルリン管区教会総監督[かつシュタジ IM]のクルシェ(Generalsuperintendent Günter Krusche)<sup>10</sup>は、二人の「楽曲の上演がキリスト教の使命に合致しているかどうかを至急検討するように」と教区に依頼したので、それへの「苦情」の声も上ががった。

そのため教会指導部としての対応が求められ、「幾つかの反体制グループの創設者かつメンバー」である牧師パーンケ(Rudi Pahnke)<sup>11</sup>が対応案をフォルクに提示した。

対応案には、「礼拝あるいは宗教的行為の性格を持たない諸催し」を教会は「長年実施し」、「非キリスト教徒も参加している」のだから、そこに問題は全くなく、問題は「国家による出演禁止[=職業禁止]が科された芸術家を出演させ得るか、またどのような条件の下に出演させ得るか」だけであり、その際「国家からの照会は、教会指導部や教区指導部、職員、教区にとって判断基準ではない」とあった。

この案は、「判断基準ではない」を「最終的には決定的ではあり得ない」に変更するなど「多少軟化」させて決定され、ベルリン・ブランデンブルクの各教区に「手引きとして」伝達された。これが 1987 年 5 月 18 日付けの「教会の催しと教会内における催しのための活動支援」という文書である。

<sup>10</sup> ドレスデン生まれのクルシェ(1931-2016)は 1983 年からベルリン・ブランデンブルク福音教会ベルリン管区総監督、かつ DDR 福音教会連盟(BEK)の人権活動グループメンバーであった。すでに 1960 年代末以来 IM「ギュンター」としてシュタジとの接触を続け、「1980 年代には教会の保護区域内での反体制行動の正当性をますます否定」するようになった。1993 年 IM としての協力が露見して総監督を辞任し早期引退となった(Müller-Enbergs 2010:567; <https://www.jugendopposition.de/lexikon/personen/148104/guenter-krusche>)。同姓の福音教会指導部協議会議長 Werner Krusche(1917-2009)は「社会主義の中での教会」という定式化で有名なホーネッカーと

その結果、教会が「責任を負い得ない」催しは「人間軽蔑的、人種差別主義的、軍国主義的、ファシスト的」ないしは「暴力活動が呼びかけられる」催しに限られ、教区民と出演者の「対話」開催が「基本的な条件」となった。

手引きは「ベルリンの諸教区」だけではなく「DDR[東独]全土で[教会内の]諸グループが論証の助けとして利用した」。教会内諸グループの緩やかな連合体である「連帯を具体的に」(Solidarität konkret)が、この手引きを全国に「広く知らせ」、加えてフォルク自身が当時シュピーゲル誌上(Forck 1987) [3.2 節参照]で手引きの「見解を裏付けた」からである。

クルシェは 1987 年 5 月 25 日の教会問題国家書記局との会談で、ベルリン・ブランデンブルク福音教会指導部が現在「クラウチクという話題」を容認することを余儀なくされていると伝えた。それは[著者の推測では]、[6 月予定の教会大会(図 4)をめぐる]「下からの教会大会」[補足 2 参照]および「教会指導部内の紛争」の処理に手一杯のためだっただろう。

しかしこの会談に同席したフォルクは当局にはっきりと、「この活動支援[=上記の手引き]の存在とそれに含まれる諸基準を通知し」、「それゆえクラウチクとクリーアの出演は[催し政令の]届け出義務に該当しない」し、「近く東ベルリンで開催される」[教会大会でも]「そのように扱われる」と伝えた。[実際に下からの教会大会にクラウチクが出演した(補足 2)。]

図 4 ベルリン 750 周年ベルリン・ブランデンブルク教会大会の閉会式(東ベルリン 1987 年 6 月 26 日)



(出所) <https://www.mdr.de/zeitreise/stoebbern/damals/artikel116798.html>

またフォルクは 1987 年 6 月初めに各教区教会役員会にこの手引きを通知した。それは[二人を招くための]「国家の圧力から保護」を与えたわけではないが、「より良い論拠」を与えた。[但し手引きには補足 3 のように異なる評価もある。]

二人は成功裏に出演を続けた。「様々なサミズダート新聞情報に基づく「環境新聞」(Umweltblätter) 1987 年 12 月号によれば、「1987 年 10 月・11 月だけでも 30 回もの出演が計画されていた」ことが、二人の「成功」を示した。但しそのうち「平和旬間」(Friedensdekade)に予定された 17 回のうち 8 回が取り消された。

「平和旬間」は、1980 年以来毎年 11 月に東独福音教会

シェーンヘルの政教首脳会談に同席しすでに 1983 年引退した。

<sup>11</sup> 1943 年ベルリン生まれ、1965-70 年フンボルト大学で進学を学び、大学院進学を志したが「教会と国家への批判的距離ゆえに」不許可。すでに 1960 年代末以来「異論派グループや反体制的作家たち」、「批判的マルクス主義者」と接触、牧師としては平和・環境・人権グループの活動を積極的に支援した。1982-88 年教会の社会教育者のための教育施設の講師、1988 年から東独福音教会同盟(BEK)の青年問題担当書記、1989 年 DA(民主的出発)結成に参加したが、その保守化などに反発して同年 12 月脱退した(Müller-Enbergs 2010:979)。

同盟が各教会で実施した世界平和のための礼拝と催しの 10 日間(jugendopposition.de(Lexikon))。環境新聞はシオン教会牧師館地下の環境図書館(本稿末尾 図 a~f)が「教会内情報」として合法的に発行した。]

しかし「1987 年 10 月末まではクラーとクラウチクの出演が“話し合い”によって防止され得ない場合には黙認する(dulden)との中央国家指示が存在したと思われる」[このようにこの時点まで「国家側」は妥協的であったと著者は見る。]

そのため「いくつかの県」の幹部から、「我々の市民はもはや[二人と教会による]この組織された扇動が黙認されることを理解していない」などの苦情があり、「国家側にとってはクラウチクとクラーの成功が憂慮すべき」状態となった。

そこで二人の出演禁止について[同年 10 月末に]「国家側は手本を示そうとした」。但し東ベルリンでは大規模抗議行動や西の報道機関の目が予想されるので、ラウジッツ地方[東独南東部]の 3 つの村を標的に選んだ。それについてベルリン福音州教会アーカイブ(ELAB)にあるフォルク文書の中に「報告」がある。以下はそれによる。

「これらの村」では二人の「“旅券とうわさ”と“落石”という異なる政治的爆発力を持つ 2 つのプログラムが演じられるはずだった」ので、各村当局が 3 つの教区教会役員会に取り消しを迫った。加えて、県評議会(県庁)が「この地域の総監督と交渉した」。その総監督は[ベルリン・ブランデンブルク福音教会コトブス管区]のリヒター(Reinhardt Richter)である。

フォルクは 1987 年 10 月 30 日に、コトブス県評議会議長[=県知事]ウシュカンプ(Irma Uschkamp)[1971-1989 年同職]との会談の際に、a)「国家はクラウチクのライセンスを取り消さず」に、「超法規的」に禁止しようとしているから、教会はそれに「加担しない」、b)クラウチクは[教会と]「常に会談の用意がある」[から「手引き」の条件を満たす]と述べた。

これらに基づき、リヒターも、二人は「DDR において認められた芸術家」であり「国家に彼ら[の出演]を[表立って]禁止する勇気がない」のに、その代わりに教会が禁止することはないと言い、出演続行を支持した。

[フォルクがリヒターと知事の会談に同席したのだろう。フォルクの言い分 a)は奇妙である。クラウチクの自由業認可はすでに「公式」に取り消された。おそらく上記の催し政令をめぐる議論の誤った記録だろう。下記の人民警察の警告もそのことを示している。]

しかし状況を憂慮したリヒターは、「すぐに二人に手紙を書き、状況がただならないことを彼らに知らせ、彼らの表現を多少制限するように依頼した」[リヒターのこの考えは以下の第 2 の催し場所での対応にも現れる。]

「その間に」二人は、「DDR 全体で、催し政令に基づく届け出または許可の義務のある催しを準備または実施することが禁じられた」と人民警察から「訓戒」され、二人が「出演禁止を科されたという噂」も広められた。[ということは「国家側」はラウジッツ地方だけではなく全国に指示したことになる。]

二人は「警察の訓戒ゆえに最初の会場に遅れて到着した」ところ、「居合わせた監督だけが疑義を持ったが」、主催の教区教会役員会も牧師も二人の芝居実施という「迅速な決定」をし、実際に「催しは特別な出来事なしに経過した」。

そこで「今や国家は挑戦を感じ」、「翌日県のある幹部が総監督[リヒター]に、催しを阻止すると警告し圧力をかけた。

第 2 の催し場所に向いたリヒターが、二人の「“旅券とうわさ”は福音的ではなく、だから取り消されねばならない」と圧

力をかけ、それに教区教会役員会が抵抗した末に、結局芝居は中止され、二人との討論のみが実施された。

ここでは「国家介入の脅威、保安機関の参加、アクセス道路での交通コントロール、参加する生徒たちの教師による確認等々」の「強い圧力」が行使された。

かくて「対立は一勝一敗」となり[実際は芝居を止めた教会も二人との討論は実施したのだから二人の 1.5 勝 0.5 敗]、「3 番目の場所」が焦点になり、「県評議会[県庁]は再び総監督[リヒター]に最後[3 番目]の催しの取り消しを求めた」。

ところが担当牧師が予定の芝居「落石」を「礼拝に組み込んでいた」。教区教会役員会が「戦術的な理由」から「撤退」し、実施を牧師に委嘱したのである。牧師の地位が役員会よりも「本質的により良く保護されていた」からである。

そこでリヒターは「礼拝を禁じることはできない」と考え、芝居の「取り消しを断定的に拒否した」。福音教会長老会会長シュトルペ(Manfred Stolpe)も「実施を決断し」、その後ろ盾を得て総監督リヒターは「国家幹部」[県庁幹部]に礼拝実施を通知し、芝居の台本も伝えた。ところがその際リヒターは台本の中身を見て一転、躊躇し、礼拝阻止に同意した。

しかし会場で中止を説明した際に、リヒターの手にある台本は予定演目「落石」ではなく「旅券とうわさ」であることが判明した。「落石」も批判的だが、「旅券とうわさ」ほどには「あからさまかつ辛辣な批判」ではなかった。そのためリヒターはまたも一転、上演同意を「再び県評議会に電話した」。

リヒターがなぜ間違った台本を持っていたのか。それを彼に渡した者、すなわち「おそらくシュタジ」が間違えたのか、意図的だったかどうかは今では分らない。

ともあれ村ではその夜、県幹部が動員した 50 人の要員による監視の中で、「礼拝は静かに進行し、プログラムが演じられた」。終了後双方が緊張緩和に努め、「国家側は総監督[リヒター]に、教区メンバーや牧師に対して脅していた制裁は実施されないと保証した。内密の話し合いの中でのみだ」。

「余波は終わらなかった。次の日曜日に牧師たちは第 2 の催し[のうちの芝居]の取り止めに遺憾に思うとの声明を公然と読み上げ」、「青年たちはプラカードを持ち口にテープを貼り付けて礼拝に押しかけ、国内の沈黙に注意を喚起した」。礼拝中に「旅券とうわさ」のテキストを配って秩序罰を科された牧師もいた。

[片田舎でもこうして公然と抗議の集団行動をする青年たちが登場していた。]

以上がフォルク文書の中にある「報告」の要旨である。

二人は「1987 年 11 月 9 日にハーガーへの公開書簡を書き[実際にはすでに書いたものをこの日に公開(5 節参照)]、DDR における自由な芸術と彼ら個人への嫌がらせの終焉を要求した」。それは「サミズダート」の「フリードリヒスフェルデの火災報知器」(脚注 9 参照)に載り、また催しで読み上げられて、「幅広い支持に出会った」[シュタジが注目し作戦を発動した掲載誌は「国境崩壊」であった(5 節参照)。]

しかし二人の「状況は 1987 年 12 月から困難になった」。シュタジによる二人についての「うわさ」(人種差別、ポルノ的台本、出国申請、資金不正)の流布、クラウチクの運転免許証取り上げ、検事総長による召喚と訓戒である。また色々な秩序罰が科され 12 月半ばにはその額は合計 1.3 万マルクに達した。[1.3 万マルクは上記の労働者職員平均粗月収の 101 ヶ月分相当である。]

以上で Sachse(2009:197ff.)からの紹介を終わる。なお、

同書の次の節はローザ・デモ事件である。

上記の「1987 年 12 月から困難」云々という段落の内容についてクリーアの日記 (Klier 1989) から補足したい:

1987 年 11 月 6 日の日記にすでに「シュタジの存在が増加し」、逮捕に備えたところ (5.1 節)。だから「困難になった」のは「12 月から」ではなく「11 月初旬から」と言える。

クラウチクの免許証取り上げのきっかけが日記に出るのは同年 10 月 12 日であり、11 月 10 日の日記にクラウチクの免許証取り上げ 1 年追加および 1000 マルクの罰金の通知を受け取ったとある (すでに 1.5 年取り上げ処分ともある)。

「うわさ」についてはすでに 1985 年秋の「平和旬間」の項に、シュタジが「クラウチクは出国申請をし、国を出るために教会を利用しているといううわさを国全体に広めた」とある。

その後 1987 年 2 月 10 日には、「SED は今年の初めからとりわけシュテファン [クラウチク] と彼の歌、我々の新しい演目“旅券とうわさ”に対する全国的な中傷キャンペーンを敢行している (わいせつな話や有色人種への人種差別主義などの中傷)、「これはきっとまたもシュタジのデマゴギー部門が考え出したにちがいない」とある。同年 10 月 12 日には、「うわさが繁茂し」、上記の中傷に加えて、「今ではクラウチクはシュタジのまわし者」とされ、彼が「ハメルンの笛吹き男のように若者たちを教会に誘い込む」のは「シュタジがすべての同調者をより容易に確認する」ためだとの中傷が加わり、その流布はシュタジが「参謀本部的に組織」しているだけでなく、「教会問題国家書記局や文化省、[SED] 中央委員会」も関わっているとある。

SED とシュタジが 1987 年初からキャンペーンを強めたのは、おそらく「旅券とうわさ」ゆえだろう。その初演が 1986 年 11 月であり、「タブーなき批判」をした (上記) からである。]

### (補足 1) 東独政府の「催し政令」

東独政府は 1970 年制定、1980 年改定の「催し政令」によって、「催し」、つまり「個人の集まりまたは組織された集会および公演」について、目的、主催者の義務、警察との関係その他広範な規則を定めた。但し公的機関や公認の団体・施設などはこの政令の対象外である。

1970 催し政令 (VO Veranstaltungen 1970) には、「社会主義的共同生活から生じる市民の個人的利益を守るために住居内または囲い込まれた敷地内での集まりには該当しない」(第 1 条第 3 項)とあった。

しかし 1980 催し政令 (VO Veranstaltungen 1980) では「家族の祝いや他の社会主義的共同生活から生じる住居内または市民の敷地内並びに賃借人や住宅共同体の共同施設における集まりは該当しない」(第 1 条第 4 項)と改定された。

1970 催し政令には住居と無関係の「囲い込まれた敷地」、例えば教会の敷地にも該当しなかった。

しかし 1980 催し政令では非該当は住居とその付属施設に限定された。限定の目的は非該当範囲からの教会敷地排除であったと考えられる。また 1970 催し政令にあった「市民の個人的利益を守るために」が削除された。

これについてフォルクは、上記のように、1987 年 5 月 25 日に教会問題国家書記局に対して、二人の活動支援についての [教会側の] 基準を示し、それは [催し政令による] 届け

出義務に該当しないと通知した (Sachse 2009: 202)。

### (補足 2) ベルリン 750 周年教会大会と「下からの教会大会」(1987 年 6 月東ベルリン)

ベルリン・ブランデンブルク福音教会 (東独) はベルリン 750 周年に際して東ベルリンで 1987 年 6 月 24-26 日に教会大会 (Kirchentag) を開催した。

同福音教会はその開催を、ルター年 (生誕 500 年に当たる 1983 年) の 1 年後に当局に申請し、許可された。

総監督クルシェ (脚注 10 参照) は開幕時に体制への「教会の忠誠を確約し」、当局は閉会式 (図 4) に 2 万人近く収容のスタジアムを提供した。しかし大会では、総監督クルシェと異なり、驚くべきことに老シェーンヘル (Albrecht Schönherr) がゴルバチョフ政策支持を表明した。

教会大会の各作業グループの中でも、ゴルバチョフ改革に抵抗する「SED の変らない政策についての苛立ち」が感じられた。そのため、現場で「何百人もの IM が収集した状況報告が毎日」ホーネッカーに届けられた。

[シェーンヘル (1911-2009、1981 年引退) は、東独福音教会同盟 (BEK) 結成 (1969 年) や「ボンヘッファー (図 e) に依拠した「社会主義の中の教会」という定式<sup>12</sup>の教会内合意を主導した。この定式を 1978 年 3 月 6 日のホーネッカーと彼の政教首脳会談で表明し、「対決放棄の代償として福音教会に自治権を約束するより穏やかな教会政策への転換」を引き出した (Müller-Enbergs 2010:1976)。その彼がゴルバチョフ改革支持を表明した 1 年後、ホーネッカーは 1988 年 3 月 3 日福音教会指導部会議議長ライヒ (Werner Leich) との会談の際に、10 年前の政教首脳会談においてシェーンヘルが自分にこの理念を伝え、さらに「教会は西側のトロイの木馬であってはならないと声明した」ことを強調した (青木 2018:2, SAMPO-BArch DY 30/ J IV 2/2/ 2263)。]

教会大会準備中の 1987 年 4 月 26 日、ベルリン・ブランデンブルク教会会議の場に「下からの教会大会」を実施するとの通告チラシが撒かれた (関連チラシが翌年まで計 7 回発行)。[下記のようにチラシは 10 号まで発行。]

このチラシには、とりわけ「この時期」(教会大会とその準備の期間) には東ベルリンの全教会が「この教会公式の大騒ぎに組み込まれ」、平和運動や「開かれた活動」(上記) という「我々の中心的関心事」が教会・教区から「疎外されている」から、「教区センターを占拠」して、教会大会と同じ期間に「下からの教会大会」を行なうとあった。

チラシはまた、「国家との対話」重視のために教会の中で検閲や修正、制限が強められていることを批判し、キリスト教徒は「自由になり、かつ政治的および社会的責任を引き受けることができるようになる」べきだとも記した。

この行動主体は東ベルリンの「フリードリッヒスフェルデ平和サークル」や「開かれた活動」、「反対票」、いくつかの「第三世界」グループ、「環境図書館」などのグループであったが、東ベルリン以外からの参加もあった。

教会指導部はこれに驚き、教会大会実現のために政治的配慮による制限を継続しつつ、彼らと交渉した。フォルクが「建築上の困難」を理由に教区センター使用を拒み、代わりに彼らを [教会大会終了後の] 「6 月 27 日のゲッセマネ教会での意見交換に招待した」。しかし彼らは「どんな妥協にも応

<sup>12</sup> この定式は 1971 年 7 月に東独アイゼナッハで開催された東独福音教会連盟 (BEK) 教会会議が掲げた理念「我々は社会主義と

並ぶ教会ではなく、社会主義に反対する教会でもなく、社会主義の中の教会である」を指す。

じなかった」。占拠を避けるためやむなく〔長老会会長〕シュトルペが大会開始前日に、彼らにフィングスト教会 (Pfingstkirche)〔地下鉄駅フランクフルター・トア近く〕の中庭と 4 階建て教会会館を提案した。

ところが「最大 2000 人」という設計の同会場に「すべての予想を超え」初日に約 6000 人が集まり討論したほか、クラウチクの出演を楽しんだ。多人数のため 2 日目には近くのガラヤ教会 (Galiläakirche) も提供された。

教会大会閉会式では、演説要求を拒否された「下からの教会」の数百人が横断幕を掲げてスタジアムに入ってデモ行進した。横断幕には「解放の神学—我々のためにも」、「国家と教会のグラスノスチ」などとあった。「多くの教会大会参加者がデモ行進参加者に共感を示した」。この様子を東独テレビは報じなかったが、東独のほぼ全土視聴可能な西独テレビが報じた。かくて「教会大会を脱政治化しようとしたシュトルペの試みは失敗した」。(以上主に Neubert (1998:685ff.)、一部 MDR.de (2011) による。)

下からの教会大会において話すフォルクやこの企画の中心人物クーリシュ (Uwe Kulisch)、出演したクラウチクやパンクバンド「Antitrott」と満員の観客、チラシ第 1 号と第 10 号 (日付は書かれていない)、プラカードのデザイン、ケペニック区のサッカースタジアム「Alte Försterei」〔意味は「旧営林署」、当時約 1.8 万人収容〕における公式教会大会閉会式に押しかけた「下からの教会」員約 300 人が兵役代替社会奉仕要求や「国家と教会におけるグラスノスチ」の横断幕を掲げた様子などの写真と説明が下記サイトにある：

<https://www.jugendopposition.de/themen/145405/>

### 〔補足 3〕「手引き」の否定的評価

上記の「手引き」、つまり「教会の催しと教会内における催しのための活動支援」(1987 年 5 月 18 日付け)については Sachse (2009) とは異なる以下のような否定的評価があるが、実際にはそれなしよりはましであったと言え得る。

例えば反体制派牧師であったノイバートは、手引きでは「国家からの照会とは…判断基準ではない」という「文が省かれ」、さらに「対話能力のあるグループ」を選ぶことが勧告され、パンケ案から後退したと評した (Neubert 1998:685)。

クライン (Klein 2007:357) は、二人の出演中止の法的根拠がないにもかかわらず、手引きは催しが「人々の和解」を目的としないう聖書に沿っていないなら「教会側はもはや催しに責任を持ってないと強調した」と否定的評価を下した。その際 1987 年 5 月 15 日の「パンコウ教会」でのクラウチクの「歌の夕べ“再び立つ”の初演」を例示する。東ベルリン市当局はあらかじめその「中止」を求めたが、その法的根拠がないため中止について「“希望”と表現」するしかなく、担当の女性牧師はそれに「毅然として逆らった」し、初演は「熱狂的に受け入れられた」(Klier 1989:191)。しかし上記のようにこれは催し政令の問題であり、手引きによっても対応可能であった。

「パンコウ教会」はクレーアが創設に関わったパンコウ平和サークルの拠点「古教会」(Alt Pfarrkirche) を、女性牧師はミッセルヴィッツを指す (2.1 節参照)。

### 3.2 フォルクへのシュピーゲル誌インタビュー

二人の出演をめぐる福音教会内の葛藤の最中にシュピーゲル誌 (1987 年 5 月 18 日、以下 Sp) がフォルク (以下 Fo) へのインタビューを掲載した。そのうち二人関連部分の要旨は以下のとおりである (Forck 1987) :

Sp: 「社会主義の中の教会」(3.1 節参照) にあなたが要求する役割をホーネッカーら指導部は気に入ると思うか。

Fo: 「非常に好んでいるわけではない」が、「若干の者」は社会の「安全弁」として必要だと言っている。但し国家と教会は一旦「取り決め」をしても、「繰り返し新たな問題が生じる」し、国家はその点を「まだあまり整理されない」でいる。

Sp: そういう「不確実性」を「全く異なる理由から」不安に感じている人々も〔教会内に〕いる。元々教会に関心がないのに「避難所としてのみ利用するかなりの人」がいる。「例えば国家によって出演禁止となっている芸術家」であり、「あなた自身の信者や同僚聖職者のかなりが、それは〔神の〕告知とどんな関係があるかを疑問に思っている」。

Fo: 「キリスト教徒である」ためには「異論への会話の用意も」なければならない。「異論派は時には決定的な疑問」を投げかける。芸術家の教区での出演によって「社会への根本的な疑問、望むらくはキリスト教徒であることへの根本的な疑問」も提起される。「それは悪いことではない。それは非常に良いことでさえあり得る。問題は、彼らとの会話の中で共通の新しい答えも探すかどうかである」。「〔彼らとの会話〕重視は上記 (3.1 節) にある「手引き」の「基本的な条件」に当たる。」

Sp: 「その芸術家たちは「FDJ のクラブ」で禁じられたことを演じたり、ほかでは紹介できない本を読み上げたりする。「それは教会の使命に属することか？」

Fo: 「はい、私はそう思う。問題は、我々がそこから何を生み出すかということだけである」。

Sp: 「少数派に居所を与えるという使命も？ (剣を犁に鋳直す)」「〔剣を犁に〕は非官製平和運動のスローガン」。

Fo: 「もちろんだ！」

Sp: しかし〔東独内の〕「色々な州教会が政権に批判的な芸術家の出演禁止に賛成した」。「教会内の平和グループ」に対しても、彼らは「反体制活動のために教会というすみかを乱用するマルクス主義者」だという「キリスト教徒の不信感が高まっている」。

Fo: 我々の各教区には「平和グループ、人権グループ、あるいは環境グループ」など多くのグループがあり、「半分まで、時には半分以上」が「自らを SED の意味ではなく広い意味でのマルクス主義者と理解している人々によって占められている」。「我々は」、それらが発言するだけではなく、「キリスト教の信仰から言われるべきことも発言するように、ともに配慮しなければならないだろう」。

Sp: あなたは国家から「あまりにも多くの反体制派を教会に入らせていると非難」されているが、同時に「特に平和と人権に取り組む牧師たちや教区のグループから、あなたたちが国家から特権によって買収された政権の手先だ」という非難が起こっている」。

Fo: 「それは実際に我々の状況である」。「我々が SED の手先だ」という非難は部分的には報道と関係がある」。例えば「1983 年のルター年の準備のためのルター委員会の開会式」でのホーネッカーと 2 人の監督の入場場面だ。「ベルリンの教会 750 周年」開会式の報道もだ。

そのため「上にいる人たちは明らか権力者とうまくやっているが、下の我々は以前と同じ困難を抱えている」という「疑問が教会内にすぐに生じる」。困難とは子どもの就学時、大学入学許可や当局の成人式拒否〔東独では当局が 14 才児に非宗教成人式実施〕の際の不利益、西への旅行不許可などだ。また、東独市民は国内メディアの報道の受け止めには

「非常に用心深い、ND〔東独支配党中央機関紙〕で教会が賞賛されると、それは真に受けられ、同様の疑問になる。

Sp:「はっきり言えば、SED 中央機関紙は教会について正しくは報道しないということか？」

Fo:「はっきり言えば、その報道は一面的だということだ。」「国家指導部は一方では全世界の前で、教会は社会主義の中で生きることができると表明したい。諸会談〔特に 1978 年ホーネッカーとシェーンヘルによる政教首脳会談(3.1 節参照)〕や諸交渉がそれを証明している。しかし他方で国家は「以前同様に国民教育」〔=義務教育課程〕によって各人を「できる限り、確信したマルクス主義者」にしようとしている。

こうした「二重戦略」が「イデオロギー的な困難を抱える人々の間で」、教会上層部は「我々を忘れてしまったのか？」という「疑念を育む」。

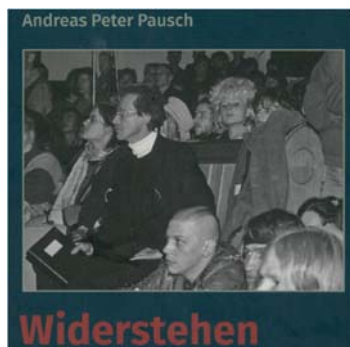
Sp:「国家はそのような怒りを、教会幹部のための気前のよい特権によって巧みに掻き立てている。例えば教会指導者は西への旅行許可をほとんど投げ与えられている。彼らのうちの多くはオファーを好んで利用している」。

Fo:「私はできる限りわずかしが〔西へ〕行かないように努めている。だが時にはそれが避けられないし、私がそうしたくないということではない。しかし私はここに留まりたい。というのは私は、非常に多くの人が〔西へ〕行くことができないことを知っているからだ」。

#### 4. 牧師ヴォンネベルガー(Wonneberger)の支援と国家圧力

牧師ヴォンネベルガー(Christoph Wonneberger)<sup>13</sup>は、その伝記 Pausch(2014)の表題「抵抗」(図 5)や東独の「平和革命の先駆者の一人」と言われる(同裏表紙)ことが示すように、二人についても彼は正面突破型の対応をした。彼の二人への対応は以下のものであった(Pausch:116ff.):

図 5 『抵抗』(Pausch 2014 表紙)



ヴォンネベルガーは、「特に、レパトリーに社会批判的なテーマを持っていたすべてのソングライターに彼の教会を開いていた」。そのうちの 1 人がクラウチクであり、ぶどう園教会(図 6)のフォーラムに招いた。クラウチクと妻クリアは職業禁止のため教会以外には出演可能性がなかった。

二人を招待する牧師が「あちこちに」いたが、同時に二人との「対照的な道徳的価値観」(二人は「社会批判、生意気、

<sup>13</sup> ヴォンネベルガーは 1944 年生まれ、父も牧師、〔そのせいか〕アピツア進学不許可、機械組み立て工の職業教育修了後、1970 年ロシュトック大学で神学を学び、副牧師、1974 年牧師、1977-1984 年ドレスデンのぶどう園教会牧師(「開かれた活動」の拠点の 1 つ)、1985 年からライプチヒのルーカス教会牧師。早くから兵役拒否の相談に乗っていたが、1979 年教会の全国規模の平和運動組織「イニシアチブ社会的平和奉仕」(兵役代替)を創設、それ以来反体制派の注目される代表者となり、1986 年にはグループ「人権」も創設。1989 年 9-10 月ライプチヒのニコライ教会の平和の祈りの

軽薄、タブー破り)などゆえに教会でも無理解も存在し、「彼らの出演は非常に議論の的であった」。

ヴォンネベルガーはその後ライプチヒのルーカス教会(図 7)に移り、同教会で 1987 年 3 月 13 日にクラウチクが歌の夕べ「我々は以前のように集まる」を、同 3 月 22 日にはクリアと共同で芝居「旅券とうわさ」を演じた(図 8)。「それはザクセン教会指導部での批判に直面した」。

図 6 ぶどう園教会(Weinbergskirche)(ドレスデン)



(出所) File:Dresden Weinbergskirche.jpg (Wikimedia Commons, CC BY-SA 3.0)

図 7 ルーカス教会(Lukaskirche)(ライプチヒ)



(出所) File\_Lukaskirche Volkmarsdorf.jpg (Wikimedia Commons, CC BY-SA 3.0)

図 8 二人の出演案内(ルーカス教会)



(注) 演目は 1987 年 3 月 13 日クラウチクの「歌の夕べ: 我々は以前のように集まる」(Pausch 2014:116 に写真)、同月 22 日二人の芝居「旅券とうわさ: 茶番劇(買い物袋からの非合理)」。(出所) Pausch(2014:118)。

その後 1987 年 5 月 6 日の手紙でザクセン州監督ヘムペル(Johannes Hempel)<sup>14</sup>がヴォンネベルガーに教会指導

責任者で、祈り後の月曜デモの共同組織者でもあった(Müller-Enbergs 2010:1453f.)。後述のように、シュタジは彼を OV「ルーカス」の対象とした。

<sup>14</sup> 1929 年生まれのヘムペルは 1971 年からザクセン州教会州監督(ノの後任)、1982-1986 年 DDR 教会指導部協議会議長(クルシェの後任)など歴任。1985 年 2 月 11 日ドレスデンでのホーネッカーとの会談で兵役拒否権承認と〔代替としての〕「社会的平和奉仕」の導入という教会平和グループの要求を支持した。ライプチヒ大学神学名誉博士(Müller-Enbergs 2010:520)。

部の「深刻な懸念」を伝えた。

ヘムペルの手紙には、出演が「再度生じる場合には」自分が介入する、「我々はずっと前からの知り合いだ、兄弟ヴォンネベルガー、…これは警告だ。あとから私が知ったような内容の〔歌の〕タベによってあなたはわが州教会の牧師としてのあなたの使命から離れ、だからあなたのミサを疑わしいものしている」、但し追伸として「話し合いの用意」があるとあった。

二人の「旅券とうわさ」(3月22日)には、ある観客から「わがDDRは泥を塗られ」、「このような催しを自分の教会で容認する牧師に仰天している」、「このような催しの実施は二度と許されるべきではない」との抗議の手紙が市長に寄せられた(手書きの手紙の写しも収録)。

だがヴォンネベルガーは、教会新聞上では「宗教改革についての歌」と「カモフラージュ」して、二人を「再び1987年10月ルーカス教会に出演させた」。これにライプツヒヒ県庁と同市役所が「ヴォンネベルガーの上司たちに国家と教会の関係が不必要に緊張しないように再度懲戒を迫った」。

ヴォンネベルガーは「国家と教会の関係には全く興味が無い」と答えるとともに、催し直前に教会周辺の店舗に二人出演のポスターを貼り出した。それらは人民警察がすぐはがしたが、口伝えで広がり、当日は約500人が訪れた。

その場でクラウチクは、「戦争玩具の禁止、武器授業と入隊前訓練の廃止、〔兵役代替の〕市民奉仕導入、連邦共和国との国境における〔逃亡者への〕“射撃命令”の廃止」を要求する「国家元首ホーネッカーへの請願書を読み上げ、それへの署名」を求め、250人が応じた。〔東独では国家元首への請願権が認められ、その投函場所も設置されていた。〕

シュタジのライプツヒヒ県支部は1985年7月からヴォンネベルガーをOPK(作戦的人物コントロール)〔盗聴・監視など〕の対象とし、それによって明白な容疑をつかみ、翌年12月10日OV(作戦事案)〔作戦名ルーカス〕を開始した。容疑は刑法第214条と第220条であり、さらに第106条についても調べるようになった。

〔第214条は「暴力または脅迫」による「国家活動または社会活動の侵害」で、5年以下の自由刑など。第220条は「国家秩序」や「公の秩序」、「は社会主義的共同生活」、「社会秩序」等の「軽蔑」や「妨害」、そのための文書等の「流布」などで、5年以下の自由刑など、これには「ファシスト的、人種的、軍国主義的または報復主義的表示」も含まれた。第106条は「国家敵対的扇動」罪で、1年～10年の自由刑であった(山田晟1982:66,95,97)。〕

## 5. 東独体制転換過程の起点としての二人の政治局員ハーガー批判公開書簡

### 5.1 公開書簡の経緯とシュタジの環境図書館急襲、歴史的役割

東独の文化・イデオロギー担当政治局員ハーガー(Kurt Hager)の報告(Hager 28.10.1987)が、1987年10月28日のSED中央機関紙NDに載った(図9)。

<sup>15</sup> 1960年生まれのヒルシュはすでに10年制義務教育中の1974年に官製青年団FDJを脱退、教会の「開かれた活動」に参加。卒業後「誤った方向に導かれた政治的見解」を理由に区役所の決定で1977年に青少年更生施設(JugendwerkhofやJugendhaus)に入れられ、そこで機械工の職業教育を受けた。1979年報告義務などの条件付きで放免されベルリン変圧器工場を経て1980年から復活教区墓地職員をしつつ、ブルース・ミサやサマリア人教区平和

二人はこれに対する公開書簡を作成・配布した(要旨は5.2節)。それは、二人の2年以上の職業禁止体験をもとに、ゴルバチョフ改革を支持しつつ、「スターリニスト」ハーガーをリーダーとする東独当局の文化政策を厳しく批判した。

この公開書簡はちょうど壁開放2年前の1987年11月9日に公開された。同月24日深夜にシュタジは東ベルリン環境図書館(本稿末尾の図f)を急襲し不当逮捕をして大きな抗議運動が起こるが、急襲のきっかけは、下記のように、この公開書簡を掲載した非合法誌「国境崩壊」が同図書館で印刷されたと見られたことであった。

図9 東独政治局員ハーガー報告  
「平和の確保とイデオロギー闘争」冒頭

Kurt Hager, Mitglied des Politbüros und Sekretär des ZK der SED

## Friedenssicherung und ideologischer Streit

Nie zuvor hat es solche Gefahren für die Menschheit gegeben wie derzeit. Die Ableitung von riesigen neuen modernen Atomenergieanlagen hat ein unvorstellbares Ausmaß erreicht, so daß es in einem Krieg wieder länger noch Bräute geben würde und die Menschheit vor dem Untergang stünde. Durch die Politik der Aggression, militärischen Kräfte des USA-Imperialismus und der NATO, die auf Hochrüstung und Stärken, auf Fortschritt gegen den Sozialismus und jeglichen gesellschaftlichen Fortschritt gerichtet ist, wächst die Bedrohung des Friedens. Auf der anderen Seite wird aber auch die Möglichkeit, einen dauerhaften Frieden zu erwirken und die in der Welt bestehenden Konflikte politisch zu lösen, noch nie so groß wie heute.

Über den gefährlichen Wettbewerb zwischen Atom und Conventional-Technologieen spricht der Drez

ist der reform

Der autorisierte Bericht wird veröffentlicht. - einen Seite in sozialistischen neuen Traditionen nicht zu und über die Zukunft sind es nicht andere in der Welt der Kollisionsbedrohung die

Das Friedensprogramm des Sozialismus

Wann diese Verwirklichung in nächster Zeit vertraglich festzulegen

(出所) Neues Deutschland, 28.10.1987.

クラーの日記(Klier 1989:229ff.)からその作成経緯や意図などを紹介する(以下の下線付き日付は日記のそれ)：

1987年11月3日：二人は「ハーガーへの公開書簡を書く決心をした〔書簡自体には日付はない〕。彼は「SED指導部内の最も容赦ないスターリン主義者の1人であり、内政〔特に文化面〕の雰囲気」に決定的な責任がある」からである。

そこで「まずそれぞれのアパートで」そのための作業をしたあと、〔盗聴の恐れゆえ〕両アパートや電話ではなく、「いずれかのへんぴな飲み屋で会い、激しく議論し、変更を申し合わせ、静かに作業に戻った。〔上記(2.4節)のように二人はシュタジのOVの対象だから「飲み屋」で誰かが聞き耳を立てていたかもしれない。〕

この書簡をクラウチクが「11月9日にサマリア人教会(図2)での彼のコンサートで読み上げることを決める。もし彼がそうすればシュタジによって強くマークされる」。

〔このように書簡公表後のシュタジの監視強化を覚悟していたが、すでに11月6日にそれを実感する。〕

同11月5日：「2日間我々は紙とタイプライターにうずもれつつ、「絶えず逮捕か家宅捜索を覚悟している」ので時々すべての下書き用紙やメモ用紙を燃やす。私の原稿や日付入り手帳、スケッチ日記、個人的な手紙を家から持ち出す。また公開書簡の件を「ただ1人ヒルシュ(Ralf Hirsch)<sup>15</sup>だけに打ち明ける」。

ドレスデンとツィッタウから出演キャンセルの連絡があり、

サークルで活動した。1982-1984年に兵役(但し兵器回避ゆえ建設兵士、その間たびたび命令違反で拘禁)。兵役終了後も福音教会や上記教区で平和活動に従事し、平和と人権イニシアチブ(IFM、1985年から準備1986年1月発足)の創設メンバーかつスポークスマンで、同イニシアチブ発行の非合法誌「国境崩壊」(Grenzfall)配布の組織者となる〔西ベルリンのヤーンとの連絡係も(補足5)〕。シュタジのOV(作戦事案)「青い鳥」(Blauvogel)(殺害

「我々が出演するはずの場所ではこの間に大騒ぎになっている」。各国家機関が各教区教会役員会に圧力や脅しで「襲いかかって」いるからである。

同 11 月 6 日:「不快なことにシュタジの存在が増加した」。二人が逮捕される場合に備えてクリアは娘ナジャ(Nadja)の世話を頼む「委任状」をヒルシュに渡す[さもないと国家施設に入れられる]。

娘に「何が起こり得るかをできるだけ慎重に説明する」。ナジャは「不安」のため「泣く」。彼女は「最近の私の落ち着きのなさや神経の緊張」を察知していた。[ナジャは 1973 年生まれだから、まだ日本の中学 3 年に当たる少女である。]

同 11 月 7 日:「公開書簡が完成し、その公表はもはや妨げられ得ない。逮捕によっても」。

「[完成]が予定部数の作成も意味するとすれば、その方法として複写機はほぼ不可能、環境図書館などの印刷機も露見可能性が高く、カーボンコピーだろう。」

公開書簡は「2 つの方向で作成した」。「国内向けには人々がついに自負心を持って社会に口を出すことを鼓舞し、第 2 の方向は西の諸政党、特に SPD(西独社民党)とその文書(=SPD・SED 共同原則文書<sup>16</sup>)に当てはまる。

「SED 指導部はこの国の実際の出来事を世界世論から覆い隠すために」大規模キャンペーンを展開し、SPD・SED 共同原則文書は「このキャンペーンの成功」に寄与している。「それに対して我々の書簡は取るに足りないものだが、おそらく少なくとも覆い隠しを少しは暴くだろう。[但し公開書簡に SPD への言及はない。彼女の SPD 批判詳細は補足 4。]

「11 月 9 日は公開書簡の朗読に最適の日である」。その日の「サマリア人教会には確実に若干の西のメディアがいるので、この書簡が西独の新聞に載るチャンスがたぶんある」からである。[下記のように西ベルリンの taz 紙が掲載した]。

「ますます多くの手が私たちの口をふさぐために伸びている」ので、この公開書簡は二人の「最後の叫び」である。

また同時に、「ここ[東独]では小さな声さえもはや出さず、その代わりにますます頻りにクーダムで見られる多くの芸術家や作家の代わりの叫びでもある」。

[クーダムは西ベルリンの中心繁華街で、そこで「見られる」芸術家・作家たちは、東独からの出国を選んだか、強要された作家等を指す(本稿末尾の表 1 参照)。3 ヶ月後に二人もそこに加わる。なお、この日午後のツヴィカウでの「プレヒの夕べ」の「感動」を生む経緯は 2.5 節に記載した。]

同 11 月 9 日:「15 時:我々はハーガー宛てのこの書簡を[SED]中央委員会の守衛に持って行く。20 時:サマリア人教会でのコンサート。シュテファンが我々の書簡を読み上げる。教会は超満員。引き続きバンドネオンのケースから 400 部が観客に配布される」。

こうしてこの「討議資料」は「小さな信徒グループだけ」ではなく、「たまたま居合わせた人々」にも渡った。

従って公開書簡の届けと公開の日は 1987 年 11 月 9 日、壁が開くちょうど 2 年前であった。

計画を含む多数の分解作戦)の対象となった。ローザ・ルクセンブルク・デモ事件(1988 年 1 月 17 日)絡みで逮捕、同年 2 月 5 日国外追放、その後(西)ベルリン市政府職員となった(Veen 2000:181; Müller-Enbergs 2010:556)。

<sup>16</sup> 1987 年 8 月 27 日発表の西独 SPD と東独 SED の「イデオロギーの争いと共通の安全保障」と題する共同の「原則文書」。シュタ

公開書簡は 11 日付けの西ベルリン紙 taz(Die Tageszeitung の通称)に掲載され(taz 11.11.1987)、西側に伝えられたが、その掲載文には大幅な省略があった。

党指導部とシュタジは公開書簡に激怒し、それを掲載した「国境崩壊」の印刷容疑でシオン教会牧師館地下の環境図書館(本稿末尾の図 a~f 参照)を急襲する。二人の対応がクリアの日記にある(Klier 1989:250f.):

1987 年 11 月 25 日「9 時。我々はラジオから諸国家機関」[実はシュタジ]の[前夜からの深夜の]環境図書館急襲と若干名の逮捕を知る。それは「最も断固とした地下誌“国境崩壊(Grenzfall)”」(補足 5 参照)の件だろうし、「予見され得た」。12 時に「検事総長の使者が明後日 10 時召喚の通知を持って来る」。

[そのため捜索や逮捕を予想して]「ようやく一昨日自宅に持ち帰った私物(メモ帳、原稿、日記カレンダー)」をまたもバッグに詰めて運び出した。「我々は非常に迅速にやつつけられかねない」。

18 時に「親愛なフィッシュベック<sup>17</sup>ら 2 人が来る。彼らとともに「我々は[環境図書館のある]シオン教会へ行く。すでに大きな集まりがある。長く分断されていた諸グループが今日はこれまでにないような団結をし、美しい光景である。全員釈放までのピケ(Mahnwachen、図 10)が決定される」。

[この時点では二人は「検事総長による召喚状」を逮捕への「合図」と捉え、さらにシュタジの急襲を知ってますます緊張したが、その予想は外れる(27 日の項参照)。]

26 日「24 時間通しのピケ」が始まる。

27 日 10 時。検事総長の召喚に応じて出向くと、「2 人の検事」が「いかなる今後の出演も我々の刑法上の帰結を引き起こすことができると戒告」しただけであった。

[情勢は]「シオンの出来事をめぐって揺れる雰囲気バロメーター次第」であり、「どの方向に向かうかははっきりしてはいないと思われる」が、「シオンで見られている」「予期せぬ連帯が SED を動揺させ、その指導部はおそらく新たに協議しなければならぬ。このようにして我々ももう一度難を免れることができた」。

このようにクリアは事態の中に党指導部の動揺も見た。この急襲は 2 年後の壁開放に至る大規模な市民抵抗の発端となる。但し二人の難は翌年 2 月の追放として現実化する

シュタジによる環境図書館急襲(1987 年 11 月 24 日から 25 日にかけての深夜)のきっかけは二人のハーガー批判の公開書簡であったことは、シュタジ文書が明記している。

例えば 1988 年 5 月 11 日付けのシュタジ文書(BV Berlin, Abt. XX, 4670)が、環境図書館で秘密裏に印刷されていた非法誌「国境崩壊」がこの公開書簡を掲載したことに憤り、作戦「罨」(Falle)でその処理に当たった経緯を記している:

「“国境崩壊”は政治局員[=ハーガー]と人民議会への“公開書簡(Krawczyk - Hager)」を掲載し、政府メンバーを貶めた。党指導部と調整された中央決定によって、“国境崩壊”の刊行が阻止されることになった。

ジ ZAIG は文書への西独与野党や東独住民の反応を集めた。  
<sup>17</sup> 物理学者フィッシュベック(Hans-Jürgen Fischbeck、1938 年生まれ)は 1962-1991 年東独科学アカデミー中央電子物理学研究所研究員であった。1987 年 4 月 24-28 日のベルリン-ブランデンブルク教会会議に壁批判の動議「隔離の実践と原則の拒否」(Bickhardt 1988 所収)を提案した 13 人の 1 人として有名である。

というのはこの間に何部かがモスクワやプラハ、ワルシャワ、ブダペストに届いたからである。

その発行阻止について「教会の指導的人物たちとの一連の会話が持たれた。けれども彼らとのすべての会話が無駄であった。

さらに「教会問題国家書記局」が最高宗務会議員・BEK 官房長ツィーグラー(Martin Ziegler)を出頭させ、11月21日までに「原紙とすでに印刷された“国境崩壊”」の引き渡しを求めた。

ところが「“国境崩壊”の印刷が続行されたので、1987年11月24日に再び中央決定に基づいて、しかしまた不確定人物に対する捜査手続きに基づいて、“国境崩壊”のさらなる印刷が阻止されることになった。

以上の引用に先立ってこの文書は、西側による東独福音教会利用と「国境崩壊」の役割を次のように説明した(以下には「新聞」とあるが、多くは雑誌とする):

「作戦地域〔主に西独〕の反社会主義勢力は、DDRにおけるその基地と同盟者を支援し動員することに懸命であり、そのために「まず第1に、〔東独の〕政治的・否定的勢力の世論に向けた諸活動のために福音教会が示す乱用可能性をより強く利用しようとしている。それは「非合法に発行される“国境崩壊”があからさまの中傷的な扇動に移行したことで明らかになった」。

「1986年に初めて若干の部数で発行された新聞“国境崩壊”は、「“平和と人権イニシアチブ”の新聞と見なされ、1987年11月にすでに800部」に達した。

同紙は「扇動的な新聞であり、刑法106条〔4節参照〕該当であるというが証拠」がある。同紙は「この間にDDRにおける否定的勢力の“指導機関紙”になった」。

シュタジは「国境崩壊」印刷中との情報を得て環境図書館を急襲した。しかし踏み込んだ時に「国境崩壊」は印刷されていなかった。それでも少年を含む館員7人の逮捕を強行し、世論の反発と抗議行動を強めた。二人もシオン教会での抗議ピケに参加した(図10)

図10 環境図書館員逮捕抗議行動に参加した二人



(注)環境図書館はベルリン・シオン教会牧師館地下に今も所在(本誌本号表紙・同裏面)。(出所)BStU, MfS, HA XX, Fo 43, in: <https://www.stasi-mediathek.de/medien/ueberwachung-potenzieller-sympathisanten-der-umweltbibliothek-im-umfeld-der-berliner-zionskirche/blatt/3/>

その約1ヵ月半後、出国派中心に1988年1月17日の公式ローザ・デモへの独自参加を試みた者はすべて実行寸前に逮捕された。公式デモへの独自参加は二人が前年秋に発

案し、用意された横断幕に書かれたローザの「異論の自由」はクラウチクの教示によった。従ってこの事件も環境図書館事件とともに二人の発案や行動が引き金となった。

こうして再び多数の逮捕、続く追放(二人含む)が生じ、連日日替わりの諸教会で大規模抗議集会在開催される大事件となり、シュタジは長期の大作戦「邪魔者」で対応した。

その一方でホーネッカーは教会との妥協の道を探り、1988年3月3日の東独福音教会指導部会議議長ライヒ(Werner Leich)との10年ぶりの政教首脳会談を経て出国・外国旅行政策の修正に乗り出し、1988年11月制定の「新外国旅行政令」として結実する(詳細は青木2008)。しかし翌年1月19日のローザ・デモの日には前年未遂となった独自デモがライブチャットで無許可沈黙デモ(シュタジ報告150~200人、参加者報告最大800人)として実現し、のちに秋の「革命の総稽古」だったと評される(青木2016)。また1989年初の上記新政令発効に基づき出国申請が殺到し、その処理期限の秋の闘争激化とのシュタジの予測(青木2016:166)通りになり、その翌年秋にはドイツ再統一になる。

このように二人の公開書簡は大雪崩のような政治変動の道を切り開き、まさに体制転換過程の起点となった。

#### (補足4)クリアの西独 SPD 批判

彼女の日記によれば、上記のように、二人の公開書簡(要旨は5.2節)は国内向けであると同時に、西独SPDの東独政策批判を意識したものであった。しかし公開書簡自体にはSPDに触れた文句はなく、東独の内情を暴露・批判することがSPDの政策批判になるということのようであった。

クリアはすでに「原則文書」(脚注16)以前の1987年5-9日の日記の中で、「次第に私は西の諸政党に憤慨するに至る」、というのは西独諸政党は東独の下からの変革努力と「希望の芽」をSEDと「共同」して「埋め戻すあらゆる努力」をしているからだ、特に社民党(SPD)は「SEDの戦術を徹底的に賛美している」などと批判した(Klier 1989:190f.)。

上記の「原則文書」についても上記(11月7日)のほか、発表翌日の8月28日の日記でも批判した(同前:209)。

また1988年1月13日には来訪したJuso(西独SPDの青年組織)の女性2人に怒りを爆発させた。

これら2人を東ベルリンに迎えて、東独の官製青年団FDJの女性たちが主催する集会有り、ポッペ(Ulrike Poppe, 補足6参照)から電話で誘われクリアも参加した。

「夕方、予期された光景。招待客や西メディアのほかにシュタジが少なくとも3分の1(私はその殆どの顔を嫌になるほど知っている)。若干の自主派も〔「自主派」は出国派か〕。「レズビアングループの3人」もいて、クリアの「女性保護施設の物語を読んでいた」。

集会ではJusoとFDJの女性たちの女性闘争の成果の講演や意見表明、質問といった「予定調和のおしゃべりの中に」、クリアが「手を挙げ、わが国の離婚率41%」や「強姦、特に婚姻中のそれ、軍国化された幼稚園に子供を行かせる女性たちの不快感」など「若干のタブーを打破する」発言をした。すると「同志たちのわめき声とブーイング」、「私のうしろで」シュタジの1人が「あれはクリアだ、監獄に入れねばならない裏切り者だ」と言い立てる。ポッペが「味方をし、同様に罵詈雑言を受ける」。その後再びFDJが場を支配し、「もう我々のような者に出番」はなくなった。

クリアは「政治的な無邪気さ」を示すJusoの2人に、



「DDR の女性の状況と、とりわけ SED-SPD 文書の諸結果について説明したかった」ので、終了直後に「至急の会話」を求めた。だが 2 人は「青シャツ〔FDJ の制服〕の女性たちと先約」があると断る。「いや明日も都合が悪い。いやおそらく全く都合が悪いのだろう。思い出す限り、SED はその青シャツを着た戦闘予備軍〔=FDJ〕とともにこの国における社会主義建設を妨げている。かつて自らこのドイツの地で社会主義建設を試みたことのある政党〔=西独 SPD〕の精神的な支持を SED が受けているのは、悲痛である」(Klier 1989:258f.)。

### (補足 5) 非合法誌「国境崩壊」(Grenzfall)

非合法誌「国境崩壊」(Grenzfall)は 1986 年 6 月 29 日付けで第 1 号を発行した。その冒頭には「グループ“国境崩壊”は自らを平和運動内の自主的で独立した活動グループと理解している」とある。目的として、平和・エコロジー・人権など種々のテーマの非官製グループ間の「全国規模の情報ネットワークを構築し整備すること、東独の「社会的上部構造」の構成と変化の研究を挙げた。同誌は「意図的に教会の支援なし」に発行し、「自主検閲」を回避した。

最初はわずか 50 部だったが、1987 年には 15~20 ページ建ての 800 部に達した。ヒルシュ(上記)が、国境検問フリーパスの東独駐在西側特派員(AP とシュピーゲル)を通じて、ヤーン(脚注 6)が調達する印刷インクや原紙を受け取った。またヤーンの手配で西独テレビ(ARD の番組 Kontraste)が同誌を紹介し(1987 年 8 月 25 日)両独全体で知られた。

最初の 3 つの号は不定期、1987 年から月刊になり、4 月号(通算第 7 号)が初めて、発行者は IFM(平和と人権イニシアチブ)のメンバーであることを明かした。「殆どの号」が個人宅で制作され、一部が[シオン教会牧師館地下の]環境図書館で印刷された[青木 2020a:17 にその印刷機の写真]。

「1987 年 11 月 25 日への深夜」にシュタジが「作戦“罨”(Falle)により環境図書館での同誌印刷の現行犯逮捕を試み、環境図書館員 7 人を逮捕した[現場には「国境崩壊」の証拠がなくその関係者もおらず少年を含む環境図書館員を逮捕した]。シュタジ急襲のため 1987 年 11・12 合併号が発行されなかったが、その後 2 号出た。(以上下記による:

<https://www.jugendopposition.de/themen/145466/grenzfall>)

「教会の支援なし」だからクリアが言うように「最も断固とした」自主性を維持し得たが、非合法となった。上記サイト掲載の表紙写真 4 枚のうち第 1 号と第 2 号には「教会内使用のみ」という手書き注意書きがあるが、1987 年の 2 つの号にはない。全号所収本があるが未入手なのでいつからそれを消したか分らないが、上記の 4/87 号かもしれない。

### (補足 6) ポッペ(Ulrike Poppe)とシュタジ IM カーリン・レンツ(本名モニカ・ヘーガー(Monika Häger))

ポッペ(旧姓 Wich)は、歴史家の父とスラブ語研究者の母のもとに 1953 年生まれ、フンボルト大学を「政治的な理由から」中断、補助教員等を経て 1976-88 年ドイツ歴史博物館[フンボルト大学近く]助手をしつつ、「ベルリンにおける反体制活動のすべての重要な諸分野で活躍し、MfS の多数の分解措置によって処理された」。1983 年には国家裏切り情報伝達の容疑で 6 週間シュタジのホーエンシェーンハウゼン拘

置所に[女流画家]ボーライ(Bärbel Bohley)と同時に留置されたが、国内外の抗議で釈放された。

1985 年から夫(Gerd Poppe)とともに IFM(平和と人権イニシアチブ)に加わった(Veen 2000:285)。IFM は前年準備の上で 1986 年初に発足し、上記の非合法誌「国境崩壊」発行に関わった。

ポッペが日本で有名になったのは NHK スペシャル「モニカとヨーナス」(1992 年)による。モニカ(Monika Häger)は暗号名カーリン・レンツ(Karin Lenz)というシュタジ IM として、ポッペ夫妻に入り込み(ヨーナスは夫妻の息子)、夫妻とそこに集まる人々の様子を、使命感を持って密告した。

私はシュタジの大規模作戦「邪魔者」の文書にある彼女の通報をいくつか読んだ。それらは集まった参加者名と議論の様子から夫婦げんかの生々しい内容までの詳細であった。

モニカの際立った特殊性はすでに東独崩壊前に IM 従事が露見し自ら認めたことであった。1989 年初めに正体をボーライやクツ、ハーベマン夫人らに見破られ、同年 6 月 8 日には IM 従事をボーライに謝罪した(Kukutz 1990: 8ff.)。その後彼女は指を差される孤独な短い後悔の人生を送った。

## 5.2 二人の政治局員ハーガー批判公開書簡の要旨

長文の二人の公開書簡(Offener Brief)の全文は非合法誌「国境崩壊」に掲載され、上記のようにシュタジの環境図書館急襲のきっかけとなった。また公開書簡は非合法の「火災報知器」にも掲載された(3.1 節に紹介)。

手元にあるのは、追放翌年に出版されたクリアの日記に収録されたものである(Klier 1989:236ff.)。その要旨は以下のとおりである:

「1987 年 10 月 28 日の ND」に掲載された「あなた」(=ハーガー、以下同様)の報告(5.1 節の図 9)を「大きな驚きをもって受け止めた」。それは「この国の多くの人々が望んでいる社会主義変革の過程の明白な拒絶」である<sup>18</sup>。

「ほぼ 40 年間 DDR の政策は非常に強くソ連の発展によって影響されてきた。だから我々がここ〔=東独、以下同様〕であら〔=ソ連、以下同様〕の人々と全く類似の紛争に苦しむほどである」。「あちらのようにここでも統治者と住民の大部分の間に大きな裂け目が支配し、住民はすべての政治的決定にいかなる関与もしていない」し、「国家権力の遍在が勤労者の政治的無関心に示される社会的無感動を作り出し」「しばしばまさに若い人たちが未来喪失の気持ちを示している」。

「ゴルバチョフのグラスノスチとペレストロイカの方針はこれらの問題を解決する今日唯一可能な道であり、政治生活のすべての分野における社会主義的民主主義を有効にかつ分別を持って展開するための唯一可能な道である」。

「あなたはこの政策を DDR 領土には拒絶することによって相変わらず DDR 内の諸関係の公然たる批判的な分析を抑圧している。けれどもこの政策はわが国の真に社会主義的な発展への多くの人々の信頼を新たに活性化するために緊急に必要なのである」。だが「実際には国家機関による圧力と禁治産宣告が相変わらず続いている」。

あなたは「西側の平和運動」を称賛するが、「同じ平和の考えを 10 年前から擁護しているこの多くの人々」は「大学から

<sup>18</sup> ハーガー報告はブランケット判 1.3 ページにわたる長文で、末尾に「フランクフルト(オーデル)県党組織活動者会議での報告から」とある。その中で彼は、ゴルバチョフが進める「変革」(Umgestaltung、ペレストロイカを指す)の「完全な成功を希望している」が、

我々は東西対立の最前線にあるという「具体的な条件」のもとで「一貫して SED 第 11 回党大会によって決定された政策を実施する」と言い、その路線の筆頭に「政治的安定性」を挙げて、ゴルバチョフ路線から明確に一線を画した。

放り出され、仕事を失い、秩序罰(罰金)を払わねばならなかった」し、「依然として国家の最も激しい圧迫に晒されている」。

「我々〔執筆者二人〕は2年以上職業禁止であり、それは「生存に関わる」。至る所に「保安機構」〔シュタジ〕が手を伸ばし「教会内での我々の出演を阻止しよう」としているし、「あなたの国家機関による全国規模の差別キャンペーンに」晒され、「電話封鎖・郵便遮断・旅行禁止」も受けている。

「教会の教区活動への国家の不当な干渉」のため「牧師たちはおじけついている」。それでも「我々の出演を追放する用意がない」牧師たちは、「ますます頻繁に500マルクの秩序罰を科されている」。

そういう状況と「非常に限られた宣伝可能性」にもかかわらず、「過去2年間で8万人以上の人々が我々の芝居のタバや歌のコンサートに来訪した」。

このことは「誠実かつ妥協なき芸術への強い社会的欲求」の存在を示している。そうした芸術は「あなたの文化政策では考慮されていない」。「再びクラウチクのある歌のプログラム〔たぶんプレヒトのタバ〕があなたの幹部たちによって拒否された。理由は、“それは文化政策の原則にもDDRの利益にも照応していないから”である。官僚が原則や住民なるものの利益を規定することを最終的にやめるのはいつのことか?」。

2年間の我々の生活と芸術は多くの人々の「寄付金」に支えられ、「我々は、それなしにはここで生きることができなかった連帯を経験した」。それは「我々の社会のますます多くの人々が自らを、成熟し自ら行動する存在と捉えようとしている

証拠」である。

彼らは不当にも「文化に二重に支払わなければならない」。つまり国家が課している「文化税」と我々への寄付である。文化税は国家が「自由に使用」可能であり、文化の質と無関係に「支配の諸関係を称賛する人たちのために巨額」を支出している。その支出手続きは「社会主義的民主主義とは全く関係がなく、封建的な習慣を想起させる」。

「だから我々は、特に我々にとって気がかりである場所で、独自のプロジェクトによって新しい社会主義的な思考と行動を始動させたい」ので、「ベルリン中央区またはプレントラウアーベルク区の空き工場のホールの1つ」を利用させて欲しい。利用の際に「どうしても必要な照明・暖房設備の資金」として、国家の「文化支出30億マルク」のうちの〔我々の観客である〕8万人つまり「人口の0.5%」相当分〔=1500万マルク〕のうちの10%=150万マルクを投資してもらいたい。

我々は「プレヒトが1951年に“ドイツの芸術家と作家への公開書簡”において支持した基準の遵守を保証する」:

「1つの制限付きの1)本の完全な自由、2)劇場の完全な自由、3)造形芸術の完全な自由、4)音楽の完全な自由、5)映画の完全な自由」。「制限とは:戦争を賛美または不可避と見なしたり、また民族憎悪を助長する出版物や芸術作品の自由はない」。

「我々もわが国の現実をより友好的に記したいのだが、現実がそうではない。敬具」。

表1 東独をその建国以来「去ったか去らねばならなかった」79人の作家等

	姓	名		姓	名		姓	名
1	Ahrends	Martin	28	Jentzsch	Bernd	55	Plivier	Theodor
2	Bartsch	Kurt	29	Johnson	Uwe	56	Poche	Klaus
3	Bartus	Jutta	30	Jokostra	Peter	57	Rachowski	Utz
4	Becker	Jurek	31	Kantorowicz	Alfred	58	Reitel	Axel
5	Bieler	Manfred	32	Kempowski	Walter	59	Raddatz	Fritz J.
6	Bienek	Horst	33	Kipp-hardt	Heinar	60	Reinig	Christa
7	Biermann	Wolf	34	Kirsch	Sarah	61	Roehricht	Karl Hermann
8	Bloch	Ernst	35	Klier	Freya	62	Rosenthal	Rüdiger
9	Brandt	Heinz	36	Kolbe	Uwe	63	Rühle	Jürgen
10	Bredel	Claus	37	Krawczyk	Stephan	64	Schacht	Ulrich
11	Brasch	Thomas	38	Kunert	Günter	65	Schädlich	Hans Joachim
12	Deinert	Wolf	39	Kunze	Reiner	66	Sallmann	Michael
13	Eckart	Gabriele	40	Lange-Müller	Katja	67	Schleef	Einar
14	Eue	Dieter	41	Lange	Hartmut	68	Schlesinger	Klaus
15	Faust	Sieg-mar	42	Langhoff	Anna	69	Schollak	Sigmar
16	Fuchs	Jürgen	43	Leonhard	Wolfgang	70	Schütz	Stefan
17	Gollin	Annegret	44	Liebmann	Irina	71	Seyppel	Joachim
18	Gregor-Dellin	Martin	45	Loest	Erich	72	Steinke	Udo
19	Groszer	Franziska	46	Loewig	Roger	73	Stern	Carola
20	Hädicke	Wolfgang	47	Maron	Monika	74	Wagner	Bernd
21	Hegewald	Wolfgang	48	Matthies	Frank-Wolf	75	Wegner	Bettina
22	Heimichs	Siegfried	49	Mayer	Hans	76	Winlder	Kalle
23	Heise	Hans Jürgen	50	Moog	Christa	77	Ziem	Jochen
24	Hilbig	Wolfgang	51	Novak	Helga M.	78	Zschorsch	Gerald K.
25	Honigmann	Barbara	52	Osterreich	Tina	79	Zwerenz.	Gerhard
26	Huchel	Peter	53	Pannach	Gerulf			
27	Jakobs	Karl-Heinz	54	Paschiller	Doris			

(原注)リストは「完全だというつもりはない」。(注)番号付きの姓・名の順の表にしたのは青木。原文は姓アルファベット順の文章。なお

「1945-1989 年に逮捕された作家の総数」の暫定調査結果は 43 件だが、これは「確かな下限」にすぎない。ほかに非職業作家や文学活動に関係するジャーナリストや評論家の「かなりの」逮捕がある (Walther 1996:373f.)。(出所) Walther 1996:90.

(写真補足)ベルリン・シオン教会と環境図書館

図 a シオン教会(入口と塔)



図 b シオン教会(祭壇側)



図 c シオン教会内部



図 d 環境図書館急襲抗議と釈放要求 (教会内展示)



図 e ボンヘッファー記念碑 (教会庭)



図 f シオン教会牧師館地下の環境図書館(赤枠)



(図 e 注) 日本でも周知の牧師・神学者・ナチ犠牲者ボンヘッファー (Dietrich Bonhoeffer) は 1931-32 年ここに在職した。  
 (図 a~e 出所) シュタジ文書調査 (科研費 26370869) の際に関連するシオン教会を訪問し撮影した (2016 年 7 月 2 日) (©Kunihiko Aoki)。  
 (図 f 注) 赤枠部分に今も環境図書館が所在。シュタジが「国境崩壊」紙対策の際に撮影。シオン教会は道路反対側に面している。  
 (図 f 出所) BStU, MfS, HA, XX/4 Nr.1968, Bl.2, in: "Stasi durchsucht Umwelt-Bibliothek" 下記サイトから 2017.04.10 採取 (現在不明)。  
[http://www.bstu.bund.de/DE/Presse/Themen/Hintergrund/20121119\\_razzia\\_umweltbibliothek.html](http://www.bstu.bund.de/DE/Presse/Themen/Hintergrund/20121119_razzia_umweltbibliothek.html)

略語

シュタジ = Stasi、東独国家保安省 (MfS) またはその職員の略称。  
 東独時代にはシュタージ (Staasi) とも略称された  
 東独 = ドイツ民主共和国 (1949-1990 年) の略称  
 東独統計年鑑 = Statistisches Jahrbuch der DDR (東独国家中央統計局 (Staatliche Zentralverwaltung für Statistik) 編)  
 BEK = Bund der Evangelischen Kirchen in der DDR, DDR 福音教会連盟 (ドイツ福音教会 (EKD) から分離して 1969 年設立の東独福音教会連合組織、両独統一により EKD に吸収)  
 bpb = Bundeszentrale für politische Bildung、連邦政治教育センター (ドイツの公的な連邦施設)  
 BStU = Die Bundesbeauftragte für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR、旧 DDR シュタジ文書連邦保管庁。2021 年 6 月連邦公文書館にシュタジ文書を移管 (本部解消、県支部は分館として存続)。  
 CSCE = Conference on Security and Cooperation in Europe、全欧安保協力会議 (1975 年ヘルシンキ宣言やその後のこの会議の進展がソ連の領土既得権の承認と引き換えに東西間の緊張緩和と交流発展、東側への人権浸透を実現)  
 DDR = Deutsche Demokratische Republik、ドイツ民主共和

国 (東独) の略称 (英語略称は GDR)  
 ELAB = Evangelisches Landeskirchliches Archiv in Berlin、ベルリン福音州教会アーカイブ  
 FDJ = Freie Deutsche Jugend、自由ドイツ青年団 (東独の官製青年組織で、SED の指導下にあった)  
 GBl = Gesetzblatt der DDR、東独官報  
 IFM = Initiative Frieden und Menschenrechte、平和と人権イニシアチブ (1986 年 1 月発足の東独反体制組織)  
 IM = Inoffizieller Mitarbeiter、非公式協力者 (シュタジに協力した密告者・工作者、暗殺に関わったこともある)  
 Juso = Jungsozialisten、若い社会主義者 (西独・現ドイツ SPD の青年組織、正式名は長い)  
 MfS = Ministerium für Staatssicherheit、国家保安省 (東独秘密警察 (シュタジ) 本部)  
 ND = Neues Deutschland (SED 中央機関紙、意味は新ドイツ)  
 OPK = Operative Personenkontrolle、作戦的人物コントロール (シュタジによる盗聴・監視など)  
 OV = Operativer Vorgang、作戦事案 (明白な容疑のある者へのシュタジの作戦措置)  
 SAMPO-BArch = Stiftung Archiv der Parteien und Massen-

organisationen der DDR im Bundesarchiv、連邦公文書館政  
党・大衆組織アーカイブ財団

SED = Sozialistische Einheitspartei Deutschlands、ドイツ社  
会主義統一党(東独支配党。戦後ドイツ共産党(KPD)がSPDの  
東独部分を吸収して発足。その後 PDS(Partei des Demokrati-  
schen Sozialismus、民主社会主義党)を経て、今は左翼党  
(Die Linke))

SPD = Sozialdemokratische Partei Deutschlands、ドイツ社会  
民主党(戦前はドイツ全土の、戦後は西独の、ドイツ統一後は再  
びドイツ全土の政党)

taz = Die Tageszeitung (西ベルリン発行の日報)

VL = Vereinigte Linken、連合左翼(1989年9月結成の東独反  
体制派)

ZAIG = Zentrale Auswertungs- und Informationsgruppe、中  
央評価・情報グループ(情報の集約・分析評価を担うシュタ  
ジ本部の最も重要な職務単位)

## 引用文献

(注)(1)本文中記載のウェブサイトと東独統計年鑑を除く。(2)  
本文中を含む各ウェブサイトは、特記しない限り、本稿発表時  
点に有効。

青木國彦(2008)東独 1988 年 4 月「中央決定」の意味と文脈:東  
独出国運動の展開と当局・教会の対応、『比較経済研究』(比較  
経済体制学会)45-1、in:

<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/gsk.html>

----- (2009) 東独出国運動の発生:逃亡の時は過ぎ、闘うべき時が  
来た、東北大学『研究年報経済学』70-2、in: 同上 [URL](#)

----- (2014) 東独イエーナの白いサークルによる沈黙円陣(1983  
年):CSCE マドリード会議閉幕を前に、『東京国際大学論叢』経  
済学部編 50、in: 同上 [URL](#)

----- (2016) ローザ・ルクセンブルクの「異論の自由」の意味と衝撃:  
1988 年 1 月 17 日東独でのローザ・デモ事件に関連して、『ロ  
シア・東欧研究』45、in: 同上 [URL](#)

----- (2018) CSCE (全欧安保協力会議) ウィーン会議へのホー  
ネッカーとシュタジの対応:東独の新外国旅行行政令と「壁は  
100年存続」発言、『社会主義体制史研究』10、in:

<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>

----- (2019) 1973 年第10 回世界青年学生祭典(東ベルリン)  
に見る自由化百景:東独ホーネッカー政権初期の「自由化」  
について(1)、『社会主義体制史研究』10、in: 同上 [URL](#)

----- (2020) 東独文化政策の規制と緩和(1963-1976 年):東  
独ホーネッカー政権初期の自由化について(2)、『社会主義体  
制史研究』12、in: 同上 [URL](#)

----- (2020a) アンソロジー「ベルリン物語」をめぐる東独作家  
たちの野望とシュタジの陰謀:東独ホーネッカー政権初期の  
「自由化」について(2)、『社会主義体制史研究』13、in: 同  
上 [URL](#):

----- (2020b) 脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」  
(原題「他人の生活」)(1):宣伝と実際、『社会主義体制史  
研究』14、同上 [URL](#)

----- (2021) 脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」(原題  
「他人の生活」)(2):批評の批評・紛糾・シュタジの作戦規定、『社  
会主義体制史研究』18、in: 同上 [URL](#)

----- (2021a) 東独における職業禁止と自由業、『社会主義体制史  
研究』19、in: 同上 [URL](#)

プレントドルフ、ウルリヒ(早崎守俊訳)(1979)『若きWのあらたな悩  
み』白水社(原作:Die neuen leiden des jungen W, 1973)

山田晟(1982)『ドイツ民主共和国法概説』下、東京大学出版会

Bickhardt, Stephan (1988) *Recht ströme wie Wasser: Chris-*

*ten in der DDR für Absage an Praxis und Prinzip der Ab-*  
*grenzung*, Wichern.

BV Berlin, Abt. XX, 4670, Bl. 44-59: Die politisch-operative  
Lage auf dem Gebiet der politischen Untergrundtätigkeit -  
Erfahrungen und Wirksamkeit der staatlichen und  
gesellschaftlichen Maßnahmen (Zeitraum Oktober 1987 - 5.  
Mai 1988), in: MfS (BStU).

Deutscher Bundestag (1994) Beschlußempfehlung und Beri-  
cht des 1. Untersuchungsausschusses nach Artikel 44 des  
Grundgesetzes, in: *Drucksache* 12/7600.

Forck, Gottfried (1987) „Wir sind eine unabhängige Vertrau-  
ensinstanz“: Der Ost-Berliner evangelische Bischof Gott-  
fried Forck über Staat und Kirche in der DDR, in: *Der*  
*Spiegel*, Nr. 21.

Hager, Kurt (28.10.1987) Friedenssicherung und ideologi-  
scher Streit, in: *Neues Deutschland*.

Klein, Thomas (2007) »Frieden und Gerechtigkeit!«: Die Poli-  
tisierung der Unabhängigen Friedensbewegung in Ost-  
Berlin während der 80er Jahre, Böhlau. (2007)

Klier Freya (1989) *Abreiß-Kalender: Ein deutsch-deutsches*  
*Tagebuch*, Knour

Kukutz, Irena; Katja Havemann (1990) *Geschützte Quelle:*  
*Gespräche mit Monika H. alias Karin Lenz mit Faksimiles,*  
*Dokumenten und Fotos*, Basisdruck.

MDR.de (2011) Evangelische Kirche und Politik: Kirchen-  
tage "im Sozialismus", in:

<https://www.mdr.de/zeitreise/stoeborn/damals/artikel116798.html>

Müller-Enbergs, Helmut u.a. (Hg.) (2010) *Wer war wer in der*  
*DDR?: Ein Lexikon ostdeutscher Biographien*, 5. aktuali-  
sierte und erweiterte Neuauflage, Ch. Links

Neubert, Ehrhart (1998) *Geschichte der Opposition in der*  
*DDR 1949-1989*, 2., durchgesehene und erweiterte Auflage,  
Ch. Links

Pausch, Andreas Peter (2014) *Widerstehen: Pfarrer Chris-*  
*toph Wonneberger*, Metropol.

Sachse, Christian (2009) *Den Menschen eine Stimme geben:*  
*Bischof Gottfried Forck und die Opposition in der DDR*,  
Wichern.

SAMPO-BArch: DY 30/ J IV 2/2/ 2263.

Spiegel, Der (16/1960) PROPAGANDA: Riesel-Feldschlacht.

Spiegel Geschichte (2015, H.3) *DDR: Leben im sozialisiti-*  
*schen Deutschland*.

Stiftung Haus der Geschichte der Bundesrepublik Deutsch-  
land u. Zeitgeschichtliches Forum Leipzig (Hg.) (2001)  
*Einsichten: Diktatur und Widerstand in der DDR*, Reclam  
Leipzig

taz (11.11.1987) Wir dokumentieren auszugsweise den Offen-  
en Brief von Stephan Krawczyk und Freya Klier, in: *taz*.

Veen, Hans-Joachim, u.a. (Hg.) (2000) *Lexikon Opposition*  
*und Widerstand in der SED-Diktatur*, Propyläen

VO Veranstaltungen 1970(1970 催し政令): Verordnung über  
die Durchführung von Veranstaltungen vom 26. Nov. 1970,  
in: *GBl*, II 1970:69. 下記にも所収

[www.verfassungen.de/ddr/versammlungsverordnung70.htm](http://www.verfassungen.de/ddr/versammlungsverordnung70.htm)

----- 1980(1980 催し政令): Verordnung über die Durchfüh-  
rung von Veranstaltungen vom 30. Juni 1980, in: *GBl*, I  
1980:235. 下記にも所収

[www.verfassungen.de/ddr/versammlungsverordnung80.htm](http://www.verfassungen.de/ddr/versammlungsverordnung80.htm)

Walther, Joachim (1996) Die Firma schreibt vor und mit:  
DDR-Autoren im Schatten der Stasi (II), in: *Der Spiegel*,  
Nr.40.